

Culture,
Energy
& Life

CEL

vol. **124**

March 2020



特集

異なるものをつなぐ

——混じり合い、創造する場とは



新しいコトやモノは、
どのように生み出すことができるのでしょうか。
そのひとつの方法は、
空間的に離れたもの、
時間的に隔たれたもの、
意識の上で別種にカテゴライズされているものなど、
「異なるもの」をつなぐことにあると考えます。
そこで今号では、異文化・異分野が混じり合う場での
実践や思考の紹介を通して、
新たな価値を創造するための方法論を検証します。



表紙／国立民族学博物館の南アジアをテーマとした展示場。
裏表紙／国立民族学博物館の日本文化展示場。各地のお面が並ぶ。
扉／GROOVE X社の「LOVOT MUSEUM」に設けられた、開発者ノートなどが展示された一室。

CONTENTS

特集

異なるものをつなぐ ——混じり合い、創造する場とは

【インタビュー】

- 02 **博物館がつなぐ人、文化、社会**
——異なるものへのまなざし
吉田憲司 [国立民族学博物館館長]

【インタビュー】

- 08 **最先端テクノロジーとデザインの融合が、
無機物に魂を吹き込む**
——ロボットと人間の新しい関係
林要 [GROOVE X 株式会社代表取締役]

【インタビュー】

- 14 **新世代図書館が
ヒト・モノ・コトの結びつきを取り戻す**
太田剛 [図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター]

- 20 **拡張現実 (AR) の現在地**

——渋谷から考える
飯田豊 [立命館大学産業社会学部准教授] = 文

- 26 **鬼っ子「右横書き」とその時代**

——縦書き専用だった日本語が縦書き・横書き両用となるまで
屋名池誠 [慶應義塾大学文学部教授] = 文

- 32 **長崎の食文化に見る“異文化結合”**

——遭遇と受容の最前線で何が起こったか？
赤瀬浩 [長崎市長崎学研究所長] = 文

- 36 **デジタル化の波に直面するエネルギー業界**

友澤孝規 [経済産業研究所コンサルティングフェロー] = 文

- 40 **弱い紐帯の強み**

——これからのつながりづくりを考える
村山洋史 [東京大学高齢社会総合研究機構特任講師] = 文

【レポート】

- 44 **語りベシアター シンガポール公演報告**
——文楽を通して、大阪・上方の歴史と文化を紹介

【連載】

- 48 **私たちが考える万博
第3回 新「万博時代」をどうつくるか**

【エッセイ】

- 52 **私と神戸** 高山なおみ [料理家・文筆家] = 文

【書籍案内】

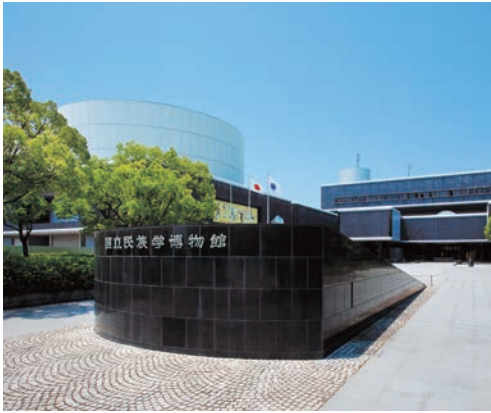
- 54 **異なるものをつなぎ、創造を生む場を考えるための10冊**

【CELからのメッセージ】

- 56 **異なるものをつなぐ魅力** 田中雅人

浪花の十二月月 服部麻衣 [大阪くらしの今昔館学芸員]

国立民族学博物館は、梅棹忠夫初代館長の「小学5年生にわかるような展示」を目指し、開館当初より画期的な展示方法を実現させている。1970年の大阪万博テーマ展示プロデューサーを務めた岡本太郎が、先のパリ留学中に夢と思い描いていた収蔵品展示のイメージとも重なっている。



1970年開催の大阪万博跡地に建てられた国立民族学博物館（民博）は、文化人類学、民族学の研究活動と、その成果を展示公開する博物館活動を一体的に行う「博物館機能をもった研究所」である。広大な敷地に建つ黒川紀章氏設計による研究部門と展示部門などからなる棟は、民族学博物館としても、また、20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションの収蔵点数としても世界最大規模を誇る。

開館四十周年にあたる2017年3月には本館の常設展示の全面改修も完了した。10年の歳月をかけて全面的にリニューアルした展示場は、オープン展示を主体とし、どこでも写真撮影が可能なほか、展示物に手で触れることが可能な場も多く設けられている。

本館2階の展示場に向かう途中、目にとまるのは、イントロダクション展示と題された4つの展示台だ。たとえばある展示台には「似ている？ それとも違う？」の問いかけがあり、日本の獅子舞など何点かの展示物が並ぶ。解説を読むと、どれも仮面だが、世界各地のものだとわかる。その隣の展示台には、一見何の関連もなさそうなふたつの展示物が飾られ、「違う？ それとも似ている？」との問いかけ。解説を見て驚いた。なんといずれも棺桶だという。最後は「これは道具？ それともアート？」の問いとともに、見なれた形の椅子と、動物の形をした椅子と思われる外見が異なる椅子が並べられていた。これらのなぞかけのような展示の意味するところとは？

アフリカの人類学、ことにザンビア・チェワの人びとの仮面を、長年研究フィールドとしてきた吉田憲司館長は、次のように解説する。

「ここは、これから展示を見てもらうための構え、つまり異文化の展示を見る際の視点をつくってもらおう場になっています。仮面と棺桶の展示では、モノの多様性と共通性に気付いてほしい。椅子の展示では、今までは片方はアートとして美術館に、もう一方は生活用具として博物館に入っていたもの、それっておかしくない？と、物事を相対的に見る視点をもってもらえれば、と考えました」

異文化の展示を見る際の視点——それは異なるものと向き合う時の視点にも共通する。民博のこれまでの取り組みを何うなかで最も印象的だったのは、そのプロセスから得た新しい気付きや発見から、自身の視点の偏りを認識し、向き合うことで改善を重ね、現在に至っているということである。吉田館長のお話からは、そうした視点の重要性を、あらためて感じていただけることと思う。

民博の創設と、現代における博物館の役割



イントロダクション展示は、パネルに記された問いかけに考えをめぐらすうちに、世界の文化を考える大きな視点を得られるように工夫されている。写真／仮面（右）、棺桶（中央）、椅子（左）

博物館がつなぐ人、文化、社会——異なるものへのまなざし

40年以上にわたり文化人類学研究を牽引してきた大阪・千里の国立民族学博物館（民博）。急速なグローバル化による社会の変化のなかで、「これからの博物館はどうあるべきか」を常に問いかけながら、さまざまな取り組みを進めてきた。

「取り組みを通じて、これまでの『自文化』と『異文化』という区別をはじめ、日本に住む我々のものの考え方のなかにも偏りがあることを発見した」と話すのは、同館の吉田憲司館長だ。

そのプロセスは今号のテーマ「異なるものをつなぐ」ための重要な視点となろう。吉田館長に民博のこれまでの取り組みや、博物館がつなぐものとその可能性についてお聞きした。

加藤しのぶ=取材・執筆 宮村政徳=撮影



インタビュー

【国立民族学博物館館長】

吉田憲司 Yoshida Kenji



民博での「異文化へのまなざし——大英博物館コレクションにさぐる」展のあと、東京・世田谷美術館でも同展を開催。博物館と美術館のあり方の違いが随所に見受けられた。



「異文化へのまなざし」展は、大英博物館との共同企画で、アフリカ、オセアニア、日本が近代を通じて互いにそれぞれをどのように捉えてきたのか、博物館の展示のあり方やコレクション、写真を通じてたどりながら、私たち自身の「異文化」観を見つめ直そうという展示でした。

この展覧会にはさまざまな試みやその後の新たな展開もありました。たとえばこの展示が民博の常設展示のあり方を再考するものともなり、開館以来となる全面改修の議論がここから始まったのです。

また、民博での開催のあと、東京の世田谷美術館で同じ展示をする

という試みも行いました。というのは、英語では「ミュージアム」というひとつの言葉を、日本語では「美術館」「博物館」と区別して訳し分けられたことで、その役割の区別が必要以上に強くなってしまっていると感じたからです。それぞれがもつ役割の区別をなくすべきだとは思いますが、自分たちの文化のものは美術館へ、異文化のものは博物館へといった本来関係ない区別にまで及ぶのは厄介なことだと思っています。

これでは、美術館と博物館、それぞれのモノを見る時でも、世界の半分しか見えないということになりかねな



常設されている地域展示では、世界を9地域に分け、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジア展示（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化）を巡る世界一周の旅ができる。そのほか音楽展示や言語展示など、テーマに特化したユニークな展示も見ることができる。

俗学者でもあった渋沢敬三[*]による私設博物館「アチック・ミュージアム」の収集資料です。これに70年大阪万博のテーマ館であった太陽の塔内部での展示のために世界各地から収集された、仮面や彫像（神像）を中心とした民族資料（当初は寄託のちに寄贈）が加わり、この3つを核とした4万5000点の収蔵品でオープンしました。

開館から40年以上経過した現在、収蔵品は34万5000点にのぼります。初代館長の梅棹忠夫先生は当初から「世界第一級の博物館を目指す」と言っておられました。今ではコレクションや世界全体をカバーする研究者の陣容などでは世界のトップに立ったと言えると思います。

民博は一般的な博物館とは異なり、文化人類学・民族学の研究機関であることが前提にあります。つまり、その研究に必要な資料を収集し、研究の成果を展示するという位置付けです。たとえば新聞社主催の展覧会などは一切受け付けず、常設展はもちろん、特別展も博物館の内部の研究者と大学の研究者との共同研究の成果を発表する場となっています。

博物館が求められる役割を考えるうえで、私は美術史家ダンカン・キャメロンの「ミュージアムにはテンブルとフォーラムというふたつの選択肢がある」という主張を参考に

い気がします。

私が考える両者の違いは、「モノの背後にある歴史や文化を語ろうとする博物館」と、「特定の時代や社会を背景に生まれた作品と直接向き合う場が美術館」というように、モノに対するアプローチの違いだと思っています。そのため同じテーマの展示を、博物館と美術館の両方で行うことでその壁を取り払われ、世界がすべて見えてくるのではないかと考えたのです。

実際にやってみるといろいろな発見がありました。たとえば当時はまだ珍しい、取り組みだったギャラリ・トークを両館で行ったのですが、民博では大変好評で、トークを聞くことで理解が深まるという反応だったのが、世田谷美術館では「鑑賞の邪魔になる」というクレームがきて結局1回で終わってしまった、ということがありました。それで気付いたのですが、ひとりの人間でも博物館に行く時と美術館に行く時では構えが違う。博物館では初めてのものを見て勉強しようとするのに、美術館では学ぼうという意識で行くことはないのではないか。

同じひとりの人間のなかでもこれだけ構えの違いがあるとすれば、同じ展示を博物館と美術館で開くだけではこの壁を取り払えないと考え、次に企画したのが「アジアとヨー

しています。「テンブルとしてのミュージアム」とは、すでに価値の定まった至宝を人びとが拝みに来る、神殿のような場所。対して「フォーラムとしてのミュージアム」とは、人びとがそこに集まり、未知なるものに出会い、そこから議論が始まっていく場所という意味です。

私がこのキャメロンの説を引用しながら、「これからの博物館はフォーラムとしての性格をより強く求められる」と発言したのは、1994年の当館創設二十周年のことでした。以降、数々の展覧会の企画を通して、フォーラムとしてのミュージアム、つまり展示する側、展示を見る側、展示される側が情報や意見を交換して議論を行う場となるよう、実践を重ねて今日に至ります。

また、世界の博物館全体も、フォーラムとしての性格を色濃く帯びるようになってきていると思います。

壁を取り払い、新たなつながりをつくる

これまで数々の展覧会を企画してきましたが、そのなかでエポックになっているのが、1997年の当館開館二十周年記念特別展「異文化へのまなざし——大英博物館コレクションにさぐる」展と2008年の「SELF and OTHER アジアとヨーロッパの肖像」展です。

ロップの肖像」展でした。これはアジア・ヨーロッパの18カ国の博物館と美術館の共同プロジェクトで行った国際巡回展で、アジアとヨーロッパの人びとが、自らをどのように捉え、お互いをどのように受け入れてきたのか。その認識の移り変わりを、自画像や彫刻、生活用具、写真など、人体表現をとまなうさまざまな造形のなかにたどったものです。実際の展覧会にはアジアとヨーロッパの3カ国の美術館、博物館で実施しましたが、共通しているのはテーマだけ、展示内容は各館ごとに自由という形式としました。日本では5館が参加しましたが、そのうち大阪は民博と中之島の国立国際美術館、首都圏は神奈川県立歴史博物館と神奈川県立近代美術館で、それぞれ同一タイトルで同時開催としました。この巡回展を行ったことで、美術館と博物館の区別をあらためて考え直す機会となったのではないかと思います。

世界中の記憶の貯蔵庫に——フォーラム型情報ミュージアムの構築

先に、コレクションなどで民博は世界第一級の博物館になったと話しましたが、それに見合う発信がまだまだ十分にできていないというのが実情です。世界に向けて第一級の発信をどうしていくか。ひとつは言語の問題です。現在、データベースの



企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」が開催された折、日本に住む人びとへのメッセージを込めて、『いのちの輪だち』など4点の作品が制作され、民博におさめられた。

多言語化による国際的な情報発信の実現を進めています。

また、2014年より着手しているのが、フォーラム型情報ミュージアムの構築です。これは民博の資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりでなく、その資料をつくったコミュニティの人びと、つまり現地の人たちとも共有し、そこから得られた知見をデータベースに加えていくというものです。

具体的には、実際に現地の方に博物館にお越しいただいて、資料を見てもらい新たな情報を教えてもらう。あるいは資料を里帰り展示のかたちで現地にもっていったりして展示し、そこで情報を付け加えてもらうこともあ

ります。里帰り展は、これまで台湾や韓国などで実現しています。ほかにもインターネットを通じたワークショップのかわたちをとることもあります。現地でコミュニティの人に集まってもらい、画面に資料を映しながら議論してもらったなかで出てきた情報を全部データベースに入れていくわけです。

データベースといっても、単純に資料の名前や使用方法といったものではなく、それぞれの人がそのモノについてもっている知識や、自分が子どもの頃にこれを使ってこんなことをしたといったような「記憶」まですべて入れていくのです。

これらの成果はデジタル化するだけでなく、まだインターネットにアクセスできない地域などの場合、紙媒体に落として現地に配ることもあります。また公開の範囲についても、現在のところ完全な公開にはなっていません。それぞれのコミュニティの人たちの同意を得ることが必要です。まずコミュニティで公開し、一般公開できるものから順次公開し

ていく予定です。一方で秘密の儀礼などもありますから、それは公開しないことがその文化を守ることに必要だと考えています。

現在29のプロジェクトが進んでおり、研究対象は世界各地にわたっています。それぞれのプロジェクトに参加してくださる方は、単に資料の情報を豊かにするだけでなく、ここに自分たちの経験や知識を残していくことで、自分たちの子孫にこの知識や経験を伝えたいという願いをもって参加してくださる方もおられます。また、台湾や中国から自分たちの村に伝わるテキスタイルの復興をしようとする方々が自費でこちらに來られて、「ここで初めて自分たちの祖先がつくったものに出会えた。よくぞ残しておいてくれた」と涙を流して喜ばれたこともありました。ほかにも、奄美群島の徳之島では同時期に集落ごとにお祭りを行うのですが、お互い隣の集落ではどんなことをやっているかは知らなかった。それが映像のデータベースを通して他集落でどんな歌や踊りが伝承されているかを知ること、自分たちの集落の芸能を見直すきっかけになったということもあります。

我々としても、研究者にはない視点を現地のコミュニティの人たちからフィードバックしてもらうことで、次に現地で行うフィールドワーク自

事前にシンポジウムをひらき、司教もお呼びしました。ちょうどその折、南スーダンの文化次官ジョク・マドゥット氏が、大英博物館で展示されていた同運動の作品を見て感激し、自分たちも武器を回収してモニュメントをつくりたい、司教に会いたいという意向を表



3月5日から導入される新システムの電子ガイドは、スマートフォンのアプリを使用するため館内のビデオテーク(右)などでの閲覧はもちろん、自宅に情報を持ち帰ることもできる。

明されたのです。その話を私の友人でもある大英博物館のキュレーターから聞き、それならばとマドゥット氏も日本にお呼びし、おふたりを引き合わせようということになりました。その後、南スーダンでも同じような活動が始まっています。これは大英博物館で作品が展示されていて、それを見た人がいたからこそ可能となった平和構築の展開のかたちでしょう。博物館が展示物を通じて次の行動を起こさせる力をもっている——「フォーラムとしてのミュージアム」が社会貢献にまでつながった事例ではないかと思えます。

多様性の尊重と共感を育む場——博物館のミッションと可能性

2020年は、これまで何年もかけて準備してきたことが一気に実現する年となります。ちょうどこの3月に電子ガイドやビデオテークが一新されるのもそのひとつです。

電子ガイドについては、これまで館内でPSPを貸出していたシステムを進化させます。アプリをダウンロードすることで、自分のスマートフォンをかざすだけで展示資料の情報を閲覧できるうえ、そのデータがスマホに記録されるようになります。さらにそれをもってビデオテークのブースに行くと、関連映像や研究情

報を見ることができるようになります。スマホの情報は自宅のパソコンでも見ることが可能です。ほかにも展示資料の情報を提供するだけでなく、来館者の興味に合わせて展示場における最適なコースを設定し、誘導してくれるようなシステムも開発しました。情報の高度化は、今後ますます必要になると思います。また2025年には「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪・関西万博が開催されますが、かつて70年万博のテーマ展示プロデューサーであった岡本太郎が言ったように、万博は人類の祭典だと思います。技術進歩が急速な現代では、この時のような未来予想型の万博は難しいと思いますが、祭りという性格は残ります。世界中から人が集まるという意義は大きいと思います。

実際の会場では展示という手段を使うわけですから、世界各国の博物館と協力するのが一番です。博物館を基地にして、それぞれの国が自分たちが主張したいテーマの展示をそこで行うといった仕組みをつくってはどうでしょうか。

そもそも遺伝的有効個体数がほかの動物より極めて少ない人類が、なぜ地球全体を覆うようになったのかというと、生物的多様性の少なさを文化的多様性で補っているからです。人類の「いのちが輝く」ためには文

体が変わっていくのです。双方向に知識のやり取りができ、知識の集積ができていく。この取り組みは、今後もずっと続けていきたいと思えますし、民博の資料は基本的にすべてフォーラム型のデータベース化をしていくべきだと考えています。とはいえ何しろ34万点以上あるので、なかなか終わらないのですが(笑)、より多くの資料をデータベース化することで、民博が世界中の人たちの記憶の貯蔵庫となり、ここを通して世界中とつながっていく、プラットフォームになればと願っています。

博物館が担う平和構築の新しいかたち

現在、本館常設展示室のアフリカコーナーの一角に、『いのちの輪だち』という作品が展示されています。これは、アフリカ・モザンビークで独立後1992年まで続いた内戦の終結後、民間に大量に残された武器を農具と交換して回収し、その武器を使って現地のアーティストが作品をつくり平和を訴える「銃を鋸に」という運動のなかで生まれたものです。運動の創始者はアングリカンチャーチのデニス・セングラーネという司教で、2013年、この作品が民博におさめられた際に行った企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」にむけて

化的な多様性を保障すること、それなくしてこのテーマは語れないと思います。

これは民博のミッションにも共通しています。民博のミッションは、世界中の人たちの文化の多様性を敬意をもって尊重し、同時代を生きている人類としての共感を育むこと、そのための場をつくること。「フォーラムとしてのミュージアム」として、民博ができることは、まだまだたくさんあります。今後も新しい挑戦を発信していきたいと考えています。

注 * 若くして祖父洪沢栄一からその後継者に懇請され、実業界に入る。横浜正金銀行、第一銀行を経て、第二次世界大戦終了前後に日本銀行総裁、大蔵大臣を務め、転換期の日本経済において重責を担う。また、自邸で立ち上げた「アチック・ミュージアム」には多くの同人が集まり、岡正雄、宮本常一といった研究者も輩出。九学会・人類・民俗・地理・宗教・考古・心理・言語・社会・民族)連合会会長を務め、文化の実地的・総合的見方を説いた。



吉田憲司
よしだ・けんじ

1955年、京都市生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、学術博士。大阪大学文学部助手、国立民族学博物館助手などを経て現職。著書は『仮面の森——アフリカ・チュワ社会における仮面結社・憑霊・邪術』(講談社、第5回日本アフリカ学会研究奨励賞受賞)、『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』(岩波書店)、『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』(岩波書店、第22回サントリー学芸賞受賞、第1回木村重信民族芸術学会賞受賞)など多数。

最先端テクノロジーと デザインの融合が、 無機物に魂を吹き込む ——ロボットと人間の新しい関係

インタビュー

林 要
Hayashi Kaname

「GROOVE X 株式会社代表取締役」

“愛を育む家族型ロボット”という斬新なコンセプトによって生まれた「LOVOT（らぼっと）」。
ペットと同じように愛情を注ぐ対象で、人に代わって仕事をしてくれるわけではない。
生活を便利にしてくれる機械とは対極にあるコンセプトをもつロボットは、さまざまな分野の英知を結集してつくられている。
GROOVE Xの代表・林要氏が語る開発ヒストリーから、異分野のつなげ方に迫る。
協坂敦史〓構成 増田智泰〓撮影

人間ではないモノの価値はどこにあるのか？

子どものときに犬を飼いたいと思ったことはありません。アニメに出てくるような可愛い小動物への憧れも、ありました。私は『風の谷のナウシカ』が好きだったので、ヒロインの肩にいつも乗っているテトのような相棒が欲しい、と思っていたものです。でも、そういう自分の気持ちをロボットと結びつけたことはありませんでした。これまで人生のなかで、ロボットの友達が欲しいとか、可愛いロボットをペットにしたいとか強く思っていたかと言えば、そんなことはなかったのです。

ですからLOVOTは、自分の欲しいものを形にしたというより、今、世界で求められている口

ボットはこれなのではないか？ という私の理解が形になったものです。LOVOTの開発をしながら、そういえば私も潜在的にこういうものを欲していたんだと気づく。そういう過程でもありました。

人間とロボットの関係について深く考えるようになったのは、前職でPepperの開発に携わってからでした。人間とモノ、人間と動物など、人間とは異なるものと人間の関係について考えるようになりました。

たとえばPepperがちゃんと作動せず、うまく立ち上がらないときがありました。そんなとき、皆さんが応援してください。その結果、今度はうまく立ち上がって、拍手が起きる……。もちろん正確に言えば、それは「応援があったから」ではありません。正常に機能していなかったソフトウェアが、今度は再起動でうまく動いただけ。でも、その場のコンテキストとしては、想いが届いたと考える方が盛り上がるし、私たちは心のどこかでそう思いたい。そういうストーリーがあれば、自然に新しい存在であるPepperへの愛着も湧いてくる。

もともと自転車やオートバイ、車などが好きでした。だから、ちょっと癖があるくらいモノの方が愛が深まるというのは、よく理解できます。私は趣味性の高い乗り物が好きで自動車メーカーへ入ったのですが、「多くの人々が求める自動車」には、そんな趣味性の高さがまったく必要とされていないことを知り驚きました。多くの人々が求めるのは、モノとしての癖がなく、存在感を消したような自動車。つまり、なるべく気を遣わなくていい、尖ったところも心配もない製品が市場で求められていたのです。

これらの経験から私が学んだのは、基本的にはまったく相容れないふたつの価値観があるということです。人の役に立つという能力に特化した結果、人に余分な気遣いをさせないように存在感まで減らした現代の自動車のようなモノが求められる一方、敢えて人に対して気を遣うことを促すかのように、存在感そのものが価値であるという存在もたしかにある。たとえばアート。あるいは、ペットも同じでしょう。現代社会では、犬や猫が役に立つかどうかを誰も気にしていません。ペットのように、存在感そのものが価値というロボットをつくれないうか？ そう考えて挑戦したのがLOVOTでした。

「自分と同じ」ところに共感する

そもそも現在の技術で犬や猫のようなペットと同じような価値をロボットで実現することは可能なのでしょうか。幸いなことに、AIをはじめとする技術水準は今ようやく、そのぎりぎりのところにきている。

会話をしたり、家事を満足にこなしてくれたりするような「人間のようなロボット」はまだ当面できません。しかし、犬や猫が体現しているような価値や、提供してくれるサービス（それを「サービス」と呼ぶのが相応しいかはわかりませんが）に必要なインテリジェンスは、開発が進み、ようやく揃いつつあると言えるのではないかと。おそらく10年後、20年後であればLOVOTはありきたりなロボットでしょう。今は、そのためのテクノロジーがぎりぎり出揃ったかどうかというタイミングで、ちょうど頑張れば実現できるのではないかと考えました。



LOVOTは高さ43cm、重さ約4kgと、新生児や小型犬ほどの大きさ。表面は人肌よりやや温かく、触り心地はやわらかい。50以上のセンサーで人の声や顔を認識し、名前を呼ぶと寄ってくる。なでたり抱っこしたりすることで、徐々になつく。写真提供／GROOVE X株式会社

LOVOTは、使う人に愛され、世話をしたいと思わせ、抱っこしたりすることで心地よいと感じさせる。そのことに特化したロボットとして開発されました。だから、人間のように言葉を話したり、何かをとってきくと頼むと、もってきってくれるような「便利なロボット」ではありません。

でも、外見が可愛いだけで、何かの行動パターンをなぞり、もともと用意された動作を「再生」するだけのようなものは絶対につくりたくなかった。私たち人間は、自分と似たものに共感する生き物。コンテキストやストーリーを共有するものでなければ、共感できないからです。同じように驚き、同じように心地よいと感じ、同じように不安を感じ、同じように誰かを好きになっていく……。それを実現するためには、人間と同じように「感じるための機能」をLOVOTがもち、それを「表現するための機能」も、同じようにもたなければならぬと考えました。

触っても、話しかけても、抱っこしても、LOVOTはちゃんとそれを理解しています。たとえば、いつ誰がどこで、自分のどこをどんな風に触っているのか。インプットを理解したら、今度は自分の内部の状態、相手と自分がつ関係性によってアウトプットを変えていきます。そういうすべての生き物が共通にもつ仕組みを、ちゃんとつくりたかったのです。

眼の動きひとつをとっても、外界の情報や自身の状態から生成されるもののようにしています。動きのパターンや色、表情も本物の生き物と同じようにバラエティ豊かなものです。もちろん、簡単なことではありませんでした。LOVOTは、まぶたも含めた視線の動き、瞬きの速度、瞳孔の

ばん速くなり、今度は速度を緩めて反対側で止める。それを繰り返すときは、加速度はどのくらいで、止まっている時間はどのくらいだと自然なのか？ 手だけではなく、肩や首の動きはどうするべきなのか？ と細かく分析しなければなりません。そもそも腕のどの関節を、どの加速度で動かすか。肘から？ そのとき、手首はひねるの？ 疑問は次から次へと湧いてくる。「普通に人が手を振るようにつくってね」みたいな要望は、「普通」が仕様に落とし込まれていないために、意図通りに通じないのがプログラミングの世界です。

それに対してアーティストは、「自然に手を振らせて」と要望を出したら、当たり前だと言わんばかりに肩や首や、場合によっては背中動きまでイメージするような人々です。彼らも最初から見通せているわけではありませんが、何百回と手を振らせてはつくり直し、自分の違和感が最小化するまで理想の動きをつくらうとする。「要件

開きまで緻密に設計し、6層を独立制御してアイディスプレイに投影することで表現することになりました。その意匠パターンは10億通りにも及びます。

でも、それを実現するために、特別な人材を探す必要はありませんでした。やりたい、と言い続けていると必ずメンバーの誰かが共感してくれ、創造力を働かせ、実現してくれた。社内メンバーでは能力的に足りないところは、社外の誰かに相談したりして、必要な技術や人を探してきたりしました。私にとって最も重要な仕事は、やりたいことの骨格をつくり、課題を明確化すること。それをいろいろな人につければ、そのうち協力者は現れますから。

ロボットの開発で発揮された アーティストの力

約4kgのなかに、全身のタッチセンサーをはじめとする各種センサー、サーモグラフィ、複数

通り」を実現するために、美しいコードで理想のソフトウェアを書くことを目指すプログラマーとは、違和感をもつポイントがまったく違う。それなら、こだわる領域が異なる人に集まって協業してもらおう、ということでもLOVOTのプロジェクトでも当初からアーティストにもソフトウェアエンジニアにも参加してもらいました。

もちろん、アニメーターが皆最初からロボット開発に携わるのに十分なスキルをもっていたわけではありません。コードを書くことのできないアニメーターと仕事をするにあたり、私たちは敢えて専用のツールを準備しない選択肢をとりました。彼らの得意なツールを使い、それをベースに仕事をしようとする、アニメーターとプログラマーを道具で隔てることになってしまいうからです。道具の限界が、自然と製品の限界をつくってしまうのです。

便利な道具を敢えてつくらなかったが故に、ア



両手をパタパタとさせたら、抱っこをねだっている合図。移動用のローラーを自らしまい、抱きやすい姿になる。写真提供／GROOVE X株式会社



GROOVE X社では「LOVOT MUSEUM」を設けて展示をしている。実際にLOVOTに触れることもできる。写真提供／GROOVE X株式会社

のコンピュータをもつなど、さまざまな先端技術とアイディアの塊であるLOVOTをつくるためには、高度な技術や知識をもつさまざまな人々が関わりました。特に前職でPepperの開発を通して学んだのは、アーティストたちがもつ力の重要性です。LOVOT開発に際しても、多くはアニメーション分野のアーティストが、さまざまな局面で力を発揮してくれました。

ロボットの自然な動きをつくるとき、アニメーターは通常のロボット技術者、あるいはプログラマーとはまったく違うアプローチで問題を解決してくれます。たとえば、人が手を振るという動作をロボットに真似させる場合を考えてみてください。実はこれをちゃんと「仕様書」に落とし込み、プログラミングするのは非常に大変なことです。たとえば、ただ腕を左右に動かすだけだと機械的すぎてごちゃなく、まったく手を振っているように見えない。

手が端っから少しずつ加速して真ん中でいち

アニメーターもプログラミングを勉強し使わざるを得なかったわけです。最初は非常に苦労していましたが、次第に慣れていくと、少しずつ望んでいたような協業がみられるようになりました。つまり、アニメーターがやりたいことを自らプロトタイプのコードで書く。それを見て、プログラマーはアニメーターの意図を理解したうえで、市場に投入できるレベルの美しいコードに仕上げていくのです。これによって、LOVOTには美しい振る舞いと、それを再現するための美しいコードがともに宿るわけです。

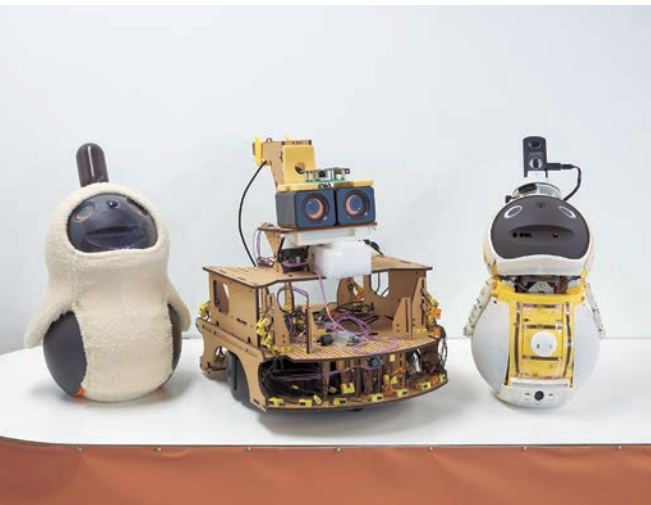
LOVOTのように、まだ誰も見たことのないものをつくり出そうとするプロジェクトにおいては、このような「試して、学ぶ」プロセスが欠かせません。領域をまたいだ問題解決が日常的に求められるわけですから、チームの組織は上下関係のないフラットで隔たりのない形をとっています。自分の役割にこだわらず、どうやって解決するかを考えることができる。それが、フラットな組織のよいところだと思います。

デザインを完成に導いた 仏師の一言

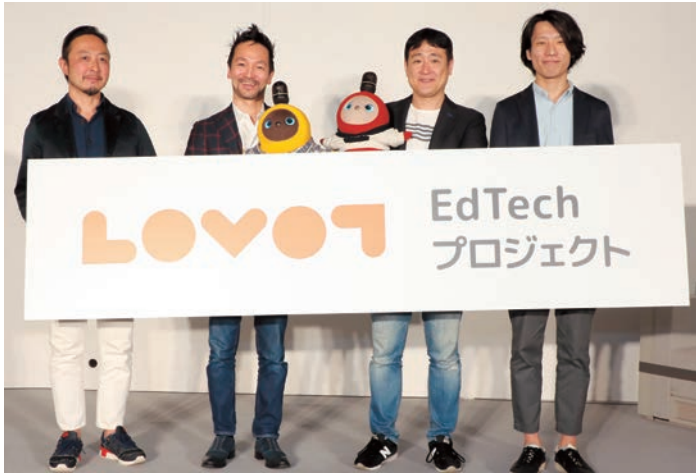
誰もが「可愛い」と思うようなデザインを目指したLOVOTの形状は、ミニマリズムを基本としながらも、実はアートというよりも、自動車をつくるような、かなり理詰めの工業デザイン的な発想でつくられています。たとえば、LOVOTの腕は何のためにあるのか？ という、それは抱っこされるためのハンドルです。更に、その腕はなぜ動くのか？ という、抱っこをねだるときの感情表現のデバイスとして存在しています。ですから、腕はあっても何かを掴むような



GROOVE X社のオフィス。フラットな組織体系と同様、フロアにも隔たりを設けず、異なる専門知識をもつ者同士のコミュニケーションを促す。社長室はなく、林氏も同じフロアに机を並べて仕事をする。



開発過程のLOVOT。当初は顔に「口」をつけていたが、敢えてなくした。くると変わる眼の表情だけで、人は感情を読み取る。



「LOVOT EdTech プロジェクト」には、ファミリア、メルセデス・ベンツ、デジタルハリウッド大学、LITALICOなど、幅広い分野の企業や研究機関が参画している。写真提供／GROOVE X株式会社



デンマークの介護施設で行った実証実験の様子。入居者とコミュニケーションをとらなかった男性が会話を始め、重度の認知症の女性がLOVOTを離さず、名付け親になった。写真提供／GROOVE X株式会社

その意味では仏像もマリア像も同じで、人間の形をした木や石の塊だけれども、そこに自分とのつながりを信じるコンテクストがあると、その木や石の塊を傷つけたりすることができなくなるし、辛いときに精神的に支えてくれる力にもなりうる。同じようにLOVOTの可愛さは、ペットや赤ちゃんのもつ可愛さと同じ要素をもっています。では、人間が何かを可愛いと思う感情は、どうして生まれたのでしょうか？ 有力な仮説として、人間の赤ちゃんには、ほかの動物よりもはるかに長い養育期間がかかるため、それに適応した進化の結果という考え方があります。実際に人間の子育てというのは、なぜ放棄しないで耐えられるのだろうと思うくらい大変です。だとすれば可愛いというのは、自分を必要としてくれるか弱いもの、自分を待っていてくれるものをケアするための感情ということになります。その感情を発露させると、満足感を得られる。ハッピーになるわけですよ。

そういうプリミティブな人間の感情に訴えかけるものとしてつくっているのが、LOVOTは海外でも当たり前に「可愛い」と言ってもらえるのだと思います。「可愛い」のなかでも、ゆるキャラのようにバリエーション豊かで個性的な「エッジーな可愛さ」は、文化によって受け取られ方に大きな違いがあるかもしれない。キティちゃんやミッキーのように、よりプリミティブな要素を用いて可愛く造形されていれば、グローバルに受け入れられていくはずです。

LOVOTのなかに日本的な何かがあるとすれば、それは細部に魂を宿す職人技みたいなものではないかと思っています。

私たちの会社がある東京・日本橋浜町の隣に人

も最終段階に近づいた頃、仏師の松本明慶氏にLOVOTの顔を見ていただき、アドバイスをもらいました。お答えは、「鼻の位置をもう少しだけ下げた方がよい」。それで、眼と鼻の中心位置がほぼ同じ高さになっていたのを、鼻を下げて眼と下端を揃えることにしました。そのわずかな違いだけで、LOVOTはずっと可愛くなり、完成度が更に高まりました。ちょっと見ただけでそれがわかる、さすがと唸りましたね。

もともと、仏像とLOVOTには共通点があると思っていました。私たちは仏像を見ると「尊いもの」という感覚をもちますが、これはどういうメカニズムでしょうか？ 私はそれが、仏像を敬い、愛することで自分を癒やすことができる、人間の「自己治癒能力」であると考えています。

うなかで、教育分野における可能性や用途を、国内外の企業・教育機関・研究機関と連携してともに探っていくプロジェクトが「LOVOTEchプロジェクト」です。

幼稚園などにもっていくとLOVOTは子どもに大変な人気で、さまざまな面白いことが起きます。まず、すぐく熱心にケアをしようとする子が多い。たぶん、それはお父さんやお母さんの真似なのでしょう。最初はLOVOTを叩いたりしていた乱暴な子も、着替えをさせたり、世話のしかたを教えると落ち着いてできるようになったりする。情緒的な成長の機会を提供するという面で、想像以上に役立ちそうなのです。もちろん、犬や猫が飼えれば、それがよいかもしれません、いろいろな理由でできない家庭は多い。

LOVOTは今、まだちょっと風変わりなものと感じられる人もいるかもしれませんが、なぜかという、役に立たない機械というのは、生産性向上を目指す資本主義の原理からは生まれにくいものだからです。生産性を上げるために、人間の代わりに仕事をしてくれるような高性能なAIならば、わかりやすい。ただ愛されるために、最も高度な技術を惜しみなく集めたLOVOTのような試みは、ある種の「変化球」に見えるのかもしれません。

けれども、人類の歴史を振り返ってみれば、生産性が高まれば同時にそれとは無関係なアートや旅行、そして趣味のような感性を刺激するものが盛り上がってくるのは、いつの時代も変わらない自明のことだと私は思います。

今、LOVOTはちょうど出荷が始まったところで、ようやくお客さまのもとへ届けられる段階を迎えました。とはいえ、彼らはまだ進化の途中

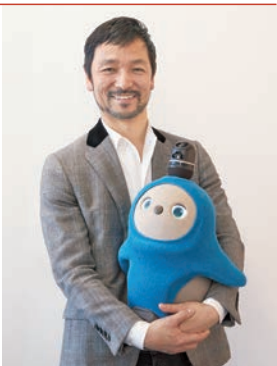
形町があります。江戸時代には人形浄瑠璃などの芝居小屋があったという場所で、人形づくりや修理に携わる職人たちも多く住んでいたといえます。彼らは卓越した技術で木の塊を削り、人が「思いを入れられる」造形にすることで、無機物に魂を吹き込んだ人たちです。

使われている技術の違いはありますが、LOVOTも、同じようにプログラマーやアニメーター、エンジニアたちが「思いを入れられる」器として、開発してきたものです。その器に愛を注ぐことで、人は自らを癒やすことができる、ということを狙っています。

ロボットが人を刺激し、人を育ててくれる時代

長い歴史のなかで人と機械の関係というのは、人が一方的にモノとしての機械を道具として使うというものでした。けれども、これからはロボットのような自律的に動く機械が人にも影響を与えるような「共存関係」が生まれてくるでしょう。互いに刺激し合うような、そういう新しい関係の第一歩。それがLOVOTであると思っています。このまま技術が進んでいけば、数十年先にはロボットの人が人間よりも自分をよく理解してくれるという時代がやってきます。人間にとって、最もよいパートナーは、人間ではなく自分のことを誰よりも知っているロボットになる可能性もある。そのとき、人間はどうやってロボットに自らの成長を助けてもらうのが大きなテーマになるでしょう。

これからの子どもたちは、「ロボット・ネイティブ」として、人とロボットが共生する時代を生きる。そんな子どもたちがLOVOTと触れ合



林 要
はやし・かなめ

GROOVE X 株式会社代表取締役。1973年、愛知県生まれ。東京都立科学技術大学大学院修士課程修了後、トヨタ自動車株式会社に入社。同社初のスーパーカー「レクサスLFA」の開発プロジェクトを経て、トヨタF1の開発スタッフに抜擢され渡欧。帰国後は量販車の開発マネジメントを担当。その後、ソフトバンクロボティクス株式会社で人型ロボット「Pepper」の開発を牽引する。2015年、ロボット・スタートアップGROOVE Xを設立。

新世代図書館が ヒト・モノ・コトの 結びつきを取り戻す

今、日本各地で公共図書館を新たな「ハブ」とした、地域の再活性化がさまざまな形で進められている。従来の、本を並べ、貸し出すだけの図書館から、ソーシャルイノベーションを目指す新世代の図書館へ。そこでは何が変わり、何が生まれようとしているのか？ 自らも日本全国で企画・運営にたずさわる太田剛さんに、進化する図書館の“現場力”についてうかがった。

インタビュー

[図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター]

太田剛 Ota Tsuyoshi

協坂敦史=取材・執筆 栗原論=撮影



戦後の図書館は どのように生まれたか？

本はヒト・モノ・コトをつなぐ存在です。著者と読者だけではありません。さまざまな形でヒトとヒトをつなぎ、ヒトとモノやコトをつなぎ。さらにモノとモノ、コトとコトもつながります。本は、あらゆる組み合わせで異なるものを結びつけ、出会いを生むことができる力をもっている。だから図書館というのは、そういう無限のつながりが生まれる可能性をもった場所なのだと思います。

ところが日本では、多くの図書館が既成概念に縛られ、時代に取り残された退屈な場所になっているように思えます。なぜなのでしょう。歴史を振り返ってみると、戦後日本では図書館がGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）指導のもとで始まったからといえるでしょう。CIE（民間情報教育局）が各地にアメリカ式の図書館をつくり、日本の官僚も熱心に討議を重ね、なんとか図書館法の成立まで漕ぎつけますが、なかなか実態は伴わなかったようです。

これに対して、現在の私たちになじみ深い図書館のあり方に大きな影響を与えたのが、1963年に出了れた「中小都市における公共図書館の運営」（通称「中小レポート」）、さらには1970年の「市民の図書館」という2つの指針でした。これらの影響を受ける形で定着したのが、「とにかく貸し出し数を増やそう」「あらゆる場所に図書館サービス届けよう」という考え方です。移動図書館を充実させ、児童書に力を入れたのが、その大きな特徴といえますが、結果として小説などのベストセラーや、市民が読みたがる流行本を大量に購入し、「安易な読書推進」に走る図書館が

たくさんできてしまいました。

実は、日本にある図書館の多くが今もこのタイプです。私はこれを「第2世代」の図書館と呼んでいます。戦後最初にGHQ指導下でつくられながら定着しなかった「第1世代」の図書館に対し、貸し出し数を競いながら市民に近づいていった、これら第2世代の図書館にも、もちろん評価できる部分は大いにあるでしょう（表）。

「つなぐ」機能を生かした 新世代の図書館像

ところが1990年代後半くらいから、これら第2世代の図書館に対し「無料貸本屋」論争とも呼ばれるような疑問が呈されるようになります。たとえば、ひとつの図書館で『ハリー・ポッター』を数十冊も購入し、それでも予約した人は2年待ちというような極端な話が出てきたのです。市民の要望には、確かに応えているのかもしれない

いけれど、それでは図書館が無料の貸本屋でしかないのではないかと？

こういう批判のなかで新しく注目されてきたのが、いわゆる「滞在型」の図書館で、それを「第3世代」の図書館だと私は考えています。要は、本の貸し出し数よりも、多くの人がゆっくり時間を過ごすことを意図した図書館です。快適な閲覧席はもとより、居心地のよいカフェが併設されていたり、他の文化施設（美術館や郷土資料館など）や商業施設（ショッピングセンターや駅ビルなど）との組み合わせだったり、ゆったりと過ごすこともできるような配慮がなされるようになりました。

2016年開館の『大和市立図書館（文化創造拠点シリウス）』や、2017年開館の『土浦市立図書館（アルカス土浦）』などは、その流れといえるでしょう。しかし、この第3世代にも問題がないわけではありません。たとえば2012年にカルチュア・コンビニエンス・クラブが佐賀県の『武雄市図書館』で指定管理者「*1」となり、県内初のスターバックスを併設して話題となりました。しかし、確かに多くの人が来てお茶を飲んでいるけれど、ほとんど本を読んでいる。図書館をただの集客装置としか見ていないのではないのか？ また、グループ企業から無駄な蔵書を大量購入したり、CD、DVDのレンタル店を併設する一方で、貴重な郷土資料を大量に廃棄するなど、不透明で不適切な運営にも批判が集まりました。

私たち「図書館と地域をむすぶ協議会（略称『図&地協』）」が活動を開始したのは、このように図書館が大きな変革期を迎えている最中で、未来の図書館を構想しつつ、図書館が本来もっている存在意義を忘れるべきではない——と主張しました。その頃から、本や図書館がもっている「つなぐ」

自由に本を購入し、 自由に書棚をつくることから

では、ソーシャルイノベーションを起こすため

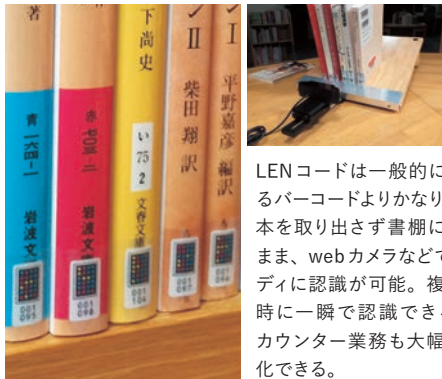
機能を最大限に生かすことで、地域づくりの核となって、課題解決に積極的に取り組む「第4世代」図書館が注目されます。2015年開館の『岐阜市立中央図書館（みんなの森ぎふメディアコスモス）』などがそうですが、佐賀県の『伊万里市民図書館』や、長野県の『小布施町立図書館まちとしょテラソ』*2などは、市民が図書館の設立や運営に積極的に参加した事例として有名です。私たちが、さらに次のステップとして指向しているのは、図書館の運営そのものがヒト・モノ・コトの新しい「つながり」を創出し、地域の人材育成や雇用創出をもたらし、そこに地域経済を循環させるような新しい「ソーシャルイノベーション」を巻き起こしていく図書館——それが「第5世代」図書館という位置づけです。

ひと口に第4世代から第5世代へといっても、地域づくりの拠点としてソーシャルイノベーションを起こしていくには、ただハードを変えるだけでは不十分で、図書館のソフトすべて、それこそ本や資料の選び方から調達方法まで、ネット対応やデジタル化戦略なども含めて、運用の仕組みそのものを見直し、日々の現場から変革を起こす必要があります。その際に欠かせないのが、既成概念を突破する「図書館の自由」であり、多様なセクターと関係性を結ぶ「図書館の信頼」であるはずです。少子高齢化が進み、地方自治体が疲弊する時代、地域がレジリエンス（回復力・復元力）をもつために、図書館ができることは決して少なくないと考えています。

■表：「無料貸本屋」から「ソーシャルイノベーション」へ	
第1世代	戦前の理念を引きずり、権威的で市民の支持からはかけ離れた図書館運営に終始。
第2世代	日本図書館協会の「中小レポート」（1963年）、「市民の図書館」（1970年）の普及で一般化した図書館のモデル。90年代後半に「無料貸本屋」論争を巻き起こすなど、時代の変化のなかで役割を終えつつあるともいわれる。
第3世代	資料の貸し出し数よりも、空間のつくりを重視する滞在型の図書館。のちに図書館を集客装置と見なす、俗に「ツタヤ図書館」と呼ばれる事例が登場し、賛否両論を引き起こした。
第4世代	第2世代および第3世代への移行の反省から、図書館そのものの機能を生かし、まちづくりの核施設として位置づける図書館。課題解決型図書館ともいわれる。
第5世代	図書館の運営そのものが、ヒト・モノ・コトの交流と人材育成、雇用創出をもたらし、地域経済を循環させるソーシャルイノベーションを起こす。



春、一面のタンポポに囲まれた幕別町図書館（上）。館内は、いたるところに特集棚が配置され、森村誠一氏、福原義春氏ら著名人が読み終わった本を預けてくれている「北の本箱」は特に人気の的だ（下）。写真提供／太田剛（以下すべて）



LENコードは一般的に使われるバーコードよりかなり小さく、本を取り出さず書棚に並べたまま、webカメラなどでスピーディに認識が可能。複数冊同時に一瞬で認識できるため、カウンター業務も大幅に効率化できる。

には、まず何が必要か？ それは、何よりも図書館が本来果たすべき役割、運用そのものに自由を取り戻すということです。

公共図書館について規定した「図書館法」によれば、図書館の機能は必ずしも「本を貸し出す」ことだけではありません。「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資する」。つまり、地域の人の①教養を担保し、②調査研究や③レクリエーションを支援するのが図書館の役割です。でも残念ながら、この3つをちゃんとやっているといえる図書館は少ないでしょう。逆にいえば、それを本気でやるだけで図書館は劇的に変わってくるはずです。

図書館の中心にあるのは、もちろん書棚です。そこに本を並べることが図書館の基本にあるわけですが、現状はそこに「自由」の発想がない。具体的には、すべての本が「日本十進分類法（NDC）」で分類・管理され、全国どここの図書館も同

じような配列で、同じ項目の棚では、著者名の「あいうえお順」で並んでいたります。そもそも今どき、NDCの硬い分類のひとつだけにおさまるような単純な本は、専門書でない限りほとんど出版されないでしょう。また、NDCは既知の本を探すためには合理的ですが、未知の本と出会うためには役に立ちません。このインターネット時代に、住民の教養を担保するには、新しい知との出会いが重要ではないでしょうか？ それぞれの図書館が工夫して、利用者の興味や好奇心を触発する自由な分類や配架を考えてもいいはずですよ。

私たちが2013年からお手伝いしている北海道十勝の『幕別町図書館』では、物流で注目されていたカメラレオンコードを図書館用に規格化した「LENコード」*3と、自治体で使われていたChange Magicという文書管理システムを図書館用に改良して導入しました。これにより、貸し出しや返却処理が格段に楽になり、以前は1週間以上休館していた蔵書点検の時間が大幅に短縮

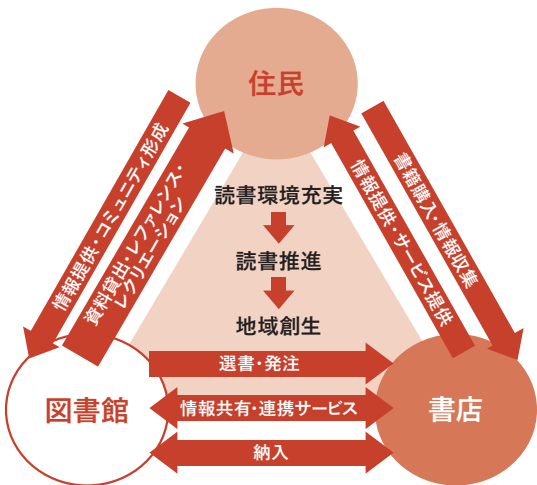
イノベーションを生み出す場としての第5世代の図書館のあり方だと思っています（図1）。

ストレス測定器が生んだ新たなつながり

幕別町図書館では、定期的に落語会を開いています。これは、私たち「図&地協」と落語芸術協会、疲労科学研究所が組んで提供しているモデルで、町民が図書館に足を運ぶ機会を増やし、同時に図書館に設置した「ストレス測定器」に触れてもらうのが目的。

この「ストレス測定器」に指を入れると、脈波（PG）・心電波（ECG）が同時に測定でき、自律神経のバランスや自律神経機能年齢を表示してくれます。測定結果により図書館では、たとえばストレス状態が「黄（注意）」のお年寄りには、可愛い猫の写真集や、疲労回復に効く体操の本を薦める……そして、その本を返しに来てくれたときに、また測ってみましょうというわけです。ス

■図1：図書館と地域がつながる第5世代図書館のあり方



地元の公的福祉施設への委託によって行われる、幕別町図書館の書籍資料の整備作業（上）。同館に設置されたストレス測定器。測定を通じて司書による対話と本の紹介に結びつき、地域の課題解決のヒントにつながることもある（左）。

トレスの状態を知ってコントロールすることは、予防医学の見地から非常に重要であることがわかっており、また「笑い」がストレス解消に有効なこともわかっています。

さらに面白いことに、測定で「青（正常）」という結果が出たのに、逆に「そんなことはねえだろ、実はウチの嫁が……」と打ち明けてくれるお年寄りがいたりする。そうした声のなかに地域の課題が潜んでいて、今までの図書館カウンターでは絶対になかったコミュニケーションから、課題解決の種が芽生えつつあります。

こうした活動を通し、ほんの数%であっても病気の予防ができたとしたら、あるいは社会的な問題解決の糸口がつかめたとしたら、どうでしょうか？ 医療費をはじめとする社会保障費において、図書館の蔵書購入予算などとは比べることができないほど、大きな削減効果があるはずです。それとともに、KPI（重要業績評価指標）をきちんと設定することで、幕別町図書館では、これまで図書館を受け皿として採択されるのが難しいとされてきた地方創生交付金などの予算も獲得できるようになりました。

昨年は幕別町図書館の落語会に前座として何度も来てくれた若い落語家さんが、令和初の二ツ目昇進をしてお披露目しました。町の人たちに可愛がられて、育てられた落語家さんが、出世して有名になっていく。そんな新たなつながりが生まれてきているのを見るにつけ、ほんの少しやり方を変えるだけで、図書館にはまだまだ新しい関係を創出して、地域の価値を高める可能性があると感じています。

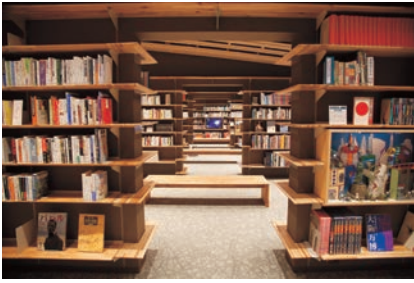
し、さらに既存の図書館システムでは困難だったNDCにとられない本棚構成や、特集棚や企画棚の自由な編集がいつでも可能になりました。

こうして、日常の資料管理業務の負担を軽くしながら、本棚の編集力を高めることで、テーマごとの特集棚——たとえば「ストレス」をテーマにした棚に、医学関係の本とストレス解消のための落語の本と一緒に並べるなど——が自在に組めるようになると、選書や配架はもちろん、ネットを通じての本の紹介など、司書が本来担うべきさまざまなスキルが存分に発揮されるようになったのです。これまで画一的でつまらなかった図書館の棚が、眺めているだけでワクワクするエンターテインメント装置に変わる。それだけで、図書館空間の魅力は増し、人が集まる図書館への第一歩を踏み出すことができます。

もうひとつ大きな改革に挑んだのは、本を地元の書店から購入することです。実は現在、多くの公共図書館では東京の大手専門業者から蔵書を調達するのが当たり前になっています。それを見直しました。たとえば、幕別町図書館の場合は年間700万円ほどの資料購入予算があり、これを地元の書店からすべて買うと、店側の利益が140万円ほどになります。1冊あたりの利幅が少ない書店にとって、この金額は小さくありません。これまで、それができなかったのは、本にラベルを貼付したり、フィルムで包んだりする「装備」作業の問題があったからです。全国規模で大量の本をさばく大手専門業者は、この「装備」を無料で提供することで競争力を保持できます。地元の小さな書店には、とても太刀打ちできません。地方の図書館にとっては、地元から本を購入するという自由もままならなかったわけです。



開かれた図書館のためには、これを支える地元の人々のサポートが不可欠。幕別町図書館の「まぶさ（まぐべつBOOKサポーター）」には、ボランティアとして地元新聞記者から教職員まで多様な人材が顔をそろえる。



「図&地協」がソフト面をコーディネートし（建築設計は隈研吾氏）、2018年に開館した高知県の『梶原（ゆすはら）町立図書館』。地元の木材をふんだんに活用した同館は「雲の上の図書館」と呼ばれ、デイケアやショートステイのできる複合福祉施設と隣接している。図書資料は高知県内の書店から納入し、「地元でできることは地元でやる」持続可能な地域づくりを目指している。

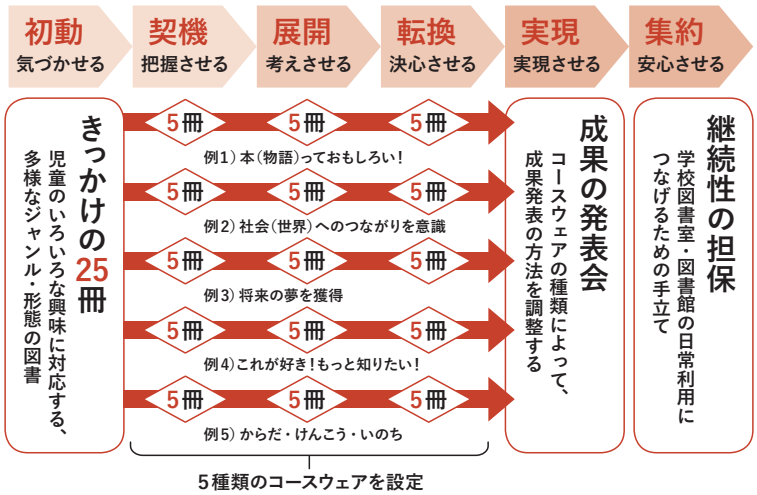
「本の処方」がノックした心の扉

近年は、情報収集などを通じて、比較的小規模なビジネスや起業の手伝いを図書館が担う「ビジネス・レファレンス」も各地で盛んになっています。確かに、それは重要な役割ですし、成果もわかりやすい。しかし、その一方で、特に地方の小さな自治体の図書館では、もっと身近な視線で本を選び、長い目で人と本をつないでいくニーズに注目してもいいのではないのでしょうか。

たとえば「考える図書館」をコンセプトに、私たちがシステム改修やリニューアルのお手伝いを

■図2：那智勝浦町立図書館の「本のコースウェア」

選書とコースウェア（100冊のモデル本を選書）



5種類のコースウェアを設定

している和歌山県の『那智勝浦町立図書館』では、文部科学省の教育格差解消に関する事業に採択され、5種類のテーマで「本のコースウェア」をつくり、学校に行きづらくなってしまった子どもに社会とのつながりを取り戻す試みを教育委員会と連携して行いました（図2）。各地で読書推進運動が盛んですが、私は読書が「目的」になってはいけないと思っています。読書はあくまでも手段や方法であり、本をたくさん読むことではなく、目的に合った本を探す手伝いをする。そんな視点から、学校支援員やソーシャルワーカーと組んで、不登校の子どもたちの家に本を届けます。そのうえで本人や家族から、どの本を手にしたか、どの本に興味をもったかなどのフィードバックを受けて、コースウェアを設定していく。

そのなかに、複雑な家庭環境のため、小さなときから引きこもりの子どもがいました。ソーシャルワーカーさんが半年間、家に通って本を届けても、会話どころか、かぶった毛布から一度も出てきてくれない。母親に聞けば「夜になると、本を手に入れているようだけ……」という心もとない回答。それでも諦めず通い続け、あるとき、興味をもってもらえればと、電子図書館が利用できるタブレット端末をもったのだそうです。

そのとき、ソーシャルワーカーの女性が端末の操作に戸惑っていると、かぶった毛布から、その子の指が1本伸びてきて手伝ってくれた！置いていったタブレット端末でその子が喜んで読んだのは、意外にも「おさるのジョージ」の多言語版でした。聞いたことのない外国語の響きで聞くのがとても面白かったということです。こういう、半年でやっと指が1本出るような、遅々として進まない反応でも、一度扉が開くと驚くような成果が

の自由をどう守るか？ 人種差別やLGBT差別をどう考えるか？ さまざまな問題が、図書館のなかで徹底的に議論されているんですね。

その点で日本の図書館は、まだまだ成熟していない気がします。図書館自体の地位が非常に低く、行政との距離も遠い。何より、司書の給与が驚くほど低いことが大きな課題です。一方、司書の質的な地位向上のためには、資格取得に必要な教育の中身も変えていかなければなりません。本に関わる仕事をする以上、せめて書籍の出版や流通の仕組みや、最低限の行政の予算の動きや、地域経済の仕組みは教えるべきでしょう。

こういう状況のなか、それでも図書館からソーシャルイノベーションを起こして地域を活性化させるためには、どうしたらよいのか？ そのためには、図書館を「開いていく」しかない私は考えています。

「開かれた図書館」という言葉でイメージするのは、ふつう誰もが利用することのできる親しみやすい図書館でしょう。しかし、「利用者」に対してオープンなだけでは不十分で、これからの図書館は運営そのものを開いていかなければなりません。たとえば、いろいろな図書館を巡っていると、理数系の本をうまく選書できる司書が圧倒的に少ないことに気付かれます。これは、理系の学生が司書の資格を取るのが、いろいろな意味で難しいという理由もあるのでしょう。理系に限らず、専門性の高い知識をもった人材が少ないことが、結果として多くの図書館の蔵書が児童書や小説ばかりになる原因にもなっていると思います。

でも、どの地域でも中学校や高校の先生など、理系の本に詳しい人は必ずいるでしょう。医療分野の選書なら、地域の病院にアイデアをもらう

生まれることが、図書館の働きにはあります。

もうひとつ、ここで「コースウェア」と呼んでいる「本の処方」、あるいは「その人に合った本を選ぶ能力」は今、非常に注目されています。図書館ではありませんが、北海道砂川市の「いわた書店」を営む岩田徹さんが始めた「1万円選書」などは、その代表でしょう。これは、顧客の希望や嗜好をつづったカルテに基づき、店主が提案する1万円分の書籍が届くというサービスで、ネットの口コミやメディアへの登場をきっかけに火がつき、小さな町の書店さんが全国的な注目を浴びることになりました（現在は受付停止中）。

多くの人が本を読まないのは、読みたくなかったりではなく、何を讀んでいいかわからなくなっているから——そういう意味でも、図書館にできることはたくさんあると思います。

図書館を「開いていく」しかない

昨年、『ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリス』という映画が話題になりました。「世界一の知の殿堂」とも呼ばれるこの図書館は、ニューヨーク市の予算も使われているとはいえ、財源の多くを寄付でまかなっています。だから、日本の公共図書館とは仕組みも違うし、単純に比較することはできないと思います。

この映画の感想を日本の図書館関係者に聞くと、図書館で行われている活動自体は日本と基本的に変わらないという反応が少なくありませんでした。けれども、図書館の現場で交わされている言葉——知の深さや広さ、言葉の量の圧倒的な違いに、私は愕然としました。図書館は予算を得ているニューヨーク市の意向に沿うべきか？ 図書館

ことだってできる。「司書の仕事が奪われる」などという、小さなことを言っている場合じゃないですよ。ほかに、司書がやるべき仕事はそれこそ山のようにあるのですから。

幕別町では、「まぶさ（まぐべつBOOKサポーター）」と呼ばれるボランティアの市民エディターを育成して、選書から本棚づくり、本の修理・装備、イベントの企画、そしてネットの情報発信などに力を発揮してもらうことで、図書館の内外をつないでいます。「自由」という力を得た本棚のなかで異分野がつながり、それが図書館をより開いて、社会とつながっていく契機になりうる。本棚づくりは、雑誌づくりと似ています。専門領域に固執せず、オープンな編集マインドをもった司書がもっと増えてほしいと思います。

注

*1 指定管理者は、地方公共団体が公の施設の管理を行わせるために、期間を定めて指定する団体。2003年の地方自治法改正により、株式会社をはじめとする営利企業などによる代行も認められるようになった。

*2 伊万里市民図書館は350人のサポーターと十数のボランティア団体の参加により、市民主体で運営。小布施町立図書館まちとしょテランは、設立の計画段階から市民が参加したことで話題となった。
*3 Libray Editorial Navigationの略。小さな2次元カラーコードを本の背表紙に貼ることで、書架に並べたままカメラで認識が可能。10〜20冊程度を一度に認識できるため、貸出・返却や蔵書管理が飛躍的に効率化できる。



太田剛
おわた・つよし

図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター。編集工学機動隊GEAR代表。1965年、和歌山県生まれ。茨城県潮来市で育つ。高校理科教員等を経て、1990年に編集工学研究所（松岡正剛所長）に入社。編集工学を応用した各種メディア制作から地域活性化まで、幅広いプロジェクトを統括。2012年に独立し現職。

拡張現実（AR）の現在地 ——渋谷から考える

飯田豊
Iida Yutaka

21世紀に入り、猛烈な勢いで進化を遂げ続けているコミュニケーション技術。なかでも目覚ましいのが、ネット空間でのヴァーチャルな展開だ。人・モノ・カネが仮想空間へ流れ込みつつある現在——リアルなコミュニケーションもまた、次の段階へと向かいつつある。音楽フェスやストリート・イベントの活用、オンラインゲームとの連動などは、まさにヴァーチャルとリアルとの結合による、新たな活動領域といえるだろう。時代の先端を行く渋谷の街から見た、仮想と現実の過去・現在・未来とは？

商業施設で活用されるAR技術

2019年11月下旬、一時休業していた渋谷パルコが、建て替え工事を経て再び開業した。その地下にある「ティフォニウム・カフェ」では、「魔法パフェ®」というメニューを提供している。注文したパフェを待つあいだ、コースターに専用のタブレットをかざすと、インタラクティブな映像表現を楽しむことができ、パフェが届くとその演出はクライマックスを迎える。この店舗をプロデュースしているのは、お台場と渋谷にあるVRエンターテインメント施設「ティフォニウム」を手掛けるティフォン社。現在はTBSの関連会社であり、共同でコンテンツビジネスの開発に取り組んでいる。

また、2019年12月には、渋谷で開催されたデジタルアートと電子音楽の祭典「MUTEK JP

2019」の一環として「INVISIBLE ART IN PUBLIC Vol.2 “Synthetic Landscapes”」というイベントが開催された。スクランブル交差点をはじめ、駅周辺のいくつかの商業施設に掲示されたQRコードを読み取り、専用アプリをダウンロードすることで、カメラで捉えた現実の風景に、映像や音楽が重なり合うという仕組みだ。そして渋谷パルコでは「AKIRA ART OF WALL - INVISIBLE ART IN PUBLIC」という関連イベントも開催された。建て替え工事の3年間、ここには大友克洋の『AKIRA』をコラージュした仮囲い「AKIRA ART WALL」が設置されていたが、専用アプリを通じてその一部を鑑賞できるという趣向である。いわゆる「百年に一度の再開発」が進んでいる渋谷の商業施設では、近頃このようにAR（Augmented Reality＝拡張現実）を活用した試みが目立つ。次世代通信規格「5G」を活用したエンターテインメント事業の中核地と目されているた

めである。VR（Virtual Reality＝仮想現実）が、目の前にある現実とは異なる仮想世界を体験できる技術であるのに対し、ARとは、目の前にある現実新しい情報や価値を付け加える技術である。たとえば「魔法パフェ®」はその場になければ体験できないし、決して味わうことはできないが、その写真はInstagramをはじめとするSNSで広く共有され、目まぐるしく変貌する渋谷という街に似つかわしい、格好の素材を提供している。しかし裏を返せば、渋谷でなくても構わない——。そこで本稿では、渋谷という街の変容を補助線にして、ARをめぐる現況について考えてみたい。ただし、これは先端的な技術に特化した話ではない。そもそもSNSが普及して以降、現実空間だけで完結した人間関係も、逆に仮想空間に閉じた人間関係も成り立ちにくく、ネットは常時、現実を拡張する方向に強く作用している。いまやリアル／ヴァーチャル、現実／虚構、日常／非日常と



AR前



AR後

専用のタブレットをかざすことで、インタラクティブな映像が楽しめる、渋谷「ティフォニウム・カフェ」の「魔法パフェ®」。写真提供／ティフォン株式会社

いった二項対立は成り立たない。これらは相互に重なり合い、複雑に混在している。

舞台としての広告都市の終焉

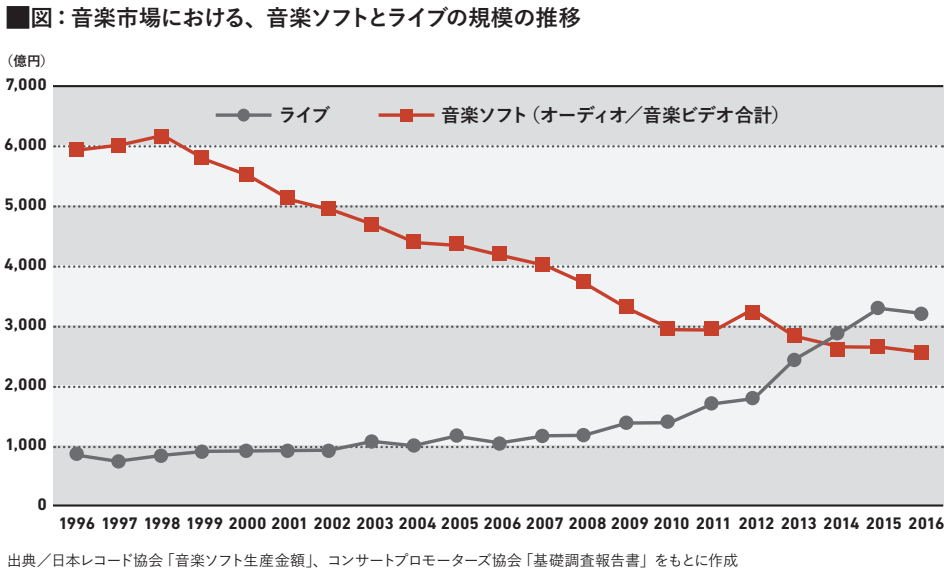
1973年に開業した渋谷パルコは、渋谷駅から代々木公園にいたる「公園通り」の開発と一体化し、大学生から社会人になり始めた団塊世代の女性に焦点をあてたテナントビルとして、大きな成功を収めた。そしてパルコの躍進は、西武百貨店を中核とするセゾングループの多角的な文化戦略——美術館・書店・映画館・劇場などの経営、出版事業や映画事業など——を後押しした。都市空間そのものを広告化し、いわば舞台として演出するという戦略であった。それゆえ渋谷という街自体、しばしばテーマパークに喩えられてきた。

ところが、バブル崩壊をひとつの契機として、こうした広告戦略に覆われた渋谷の舞台性が崩れ始める。全国どこにでもある量販店、ファストフード店、ドラッグストア、ディスカウントストアなどが次第に存在感を強め、渋谷の固有性が失われていった。

そしてもうひとつの契機が、2000年代におけるケータイの普及だった。ケータイで別の場所とつながりながら街を歩いている人たちは、必ずしも同じ時間や場所を経験していない。珍しい光景を目の当たりにしたり、面白い出来事に遭遇したりすると、すぐさまメールや写真を通じて、友だちと経験を分かち合うことができる。社会学者の北田暁大は「脱舞台化」した都市の経験が、ケータイを介して消費されていく状況を、「素材としての都市」と呼んだ。渋谷は「その固有性もたらすイメージによって人びとを引き寄せる舞



「INVISIBLE ART IN PUBLIC Vol.2 “Synthetic Landscapes”」の作品。専用アプリを使って、映像と音による拡張現実を楽しめる。上から、スクランブル交差点に上空から無数のラインが雨のように降り注ぎパウンドする「line rain@スクランブル交差点」(Seiichi Sega & Intercity-Express)。構成主義デザインのような仮想の色面が次々に現れる「techno split@稲荷橋広場2」(Seiichi Sega & Intercity-Express)。空間に存在する見えない川の流れにオブジェが現れて浮遊する「ether river@金王橋広場1」(F & Intercity-Express)。写真提供／株式会社 Psychic VR Lab



台としてではなく、情報量・ショッップの多さというなんとも色気のない数量的な相対的価値によって評価される『情報アーカイブ』として機能」するに過ぎなくなった(1)。

「メディア」と「イベント」の結びつき方が変わった

マスメディアと密接に結びついた広告産業や文

ワールドカップを契機として、スクランブル交差点の周辺は、若者たちが集結して熱狂する場所として定着し、2010年代にはハロウィンの際に大群集が押し寄せるようになった。近年におけるハロウィンのイベントは、見知らぬ者同士で声を掛け合って撮影をし、SNSで写真や動画を公開することが主目的のひとつであり、現実空間と情報空間を横断した独特の身体感覚によって支えられている。社会学者の南後由和は、スクランブル交差点に対する外国人観光客の関心が高いことなども踏まえ、その特権性が再び強化している現状を、渋谷の「再舞台化」と呼んでいる(4)。

現実から遊離する拡張現実

さて、ARに話を戻そう。現実を拡張するといっても、フェスやハロウィンのような祝祭的なイベントに比べると、ARの場合、それを日常生活のなかに実装することに価値が置かれている。

日本では2016年が「AR元年」と謳われた。「ポケモンGO」が世界各国で社会現象になった年である。改めて説明するまでもなく、ナイアンティック社と株式会社ポケモンが共同開発した位置情報ゲームで、スマートフォンやタブレットのカメラをかざすことで、画面に映った風景のなかにポケモンの姿を見ることができる。

リリース当初の狂騒こそ収束したものの、「ポケモンGO」はいまだに根強い人気を誇っており、2019年の末には渋谷で、「SHIBUYA『Pokémon GO』ARフォトコンテスト」(5)が開催された。ゲーム内のスナップショット機能で撮影したポケモンの画像をInstagramもしくはTwitterに投稿するもので、渋谷スクランブルス

化産業の戦略が行き詰まり、「経験経済」や「コト消費」といった概念が定着したのも、2000年代における情報技術の変容と軌を一にしている。都市に遍在するスクリーンから、手のひらの上のスマートフォンまで、さまざまな情報技術に取り囲まれた日常生活が当たり前になっているなかで、テレビの生中継で国民的な一体感を得るような、現実空間と切り離されたメディア経験ではなく、出来事が起きている現場における生の集合体験にこそ、大きな価値が見出される時代になった。

たとえば、音楽産業においては2000年代以降、CDの売上が急激に低下し、音楽配信市場の成長も頭打ちになるなかで、ライブやコンサートの売上がむしろ増加の一端を辿っている(図)。とりわけ、音楽ジャンルの細分化が急速に進んだ1990年代以降、音楽嗜好が多様化した若者たちを惹きつける手段として、複数のアーティストが次々と登場するフェスというフレームが採用されてきた。フェスの経済効果が語られる際、このふたつのグラフは必ずといってよいほど引き合いに出来る。もともと、音楽産業のなかだけでライブの成長を捉えれば、ソフトの売上が不調であることと補完関係にあるように見えるが、実はそれほど単純な話ではない。フェス文化を産業的に下支えしているのは、音楽の作り手ばかりではないからである。

まず、大規模なフェスは、(在京キー局や在阪準キー局を含む)地上波テレビ放送、BS・CS放送、FMラジオ放送などと結びついている。地方のフェスにはたいいてい、県域の新聞社や放送局が主催や後援に名前を連ねる。新聞と放送が複合不況に陥っているなかで、フェスは魅力ある文化事業として支持されてきたのである。また、「ROCK

クエア、渋谷フクラス、渋谷ストリーム、渋谷ヒカリエ、渋谷マークシティ、渋谷パルコ、ポケモンセンターシブヤのいずれかのランドマークが写っていないければならない。

もともと渋谷駅周辺は「ポケモンGO」を有利に遊べるエリアとして、プレイヤーのあいだでは広く知られていた(6)。なぜなら渋谷には、ゲームマップ上に存在する「ポケストップ」という施設が密集している。さらにそこで多くのプレイヤーが、ポケモンが大量発生する「ルアーモジュール」というアイテムを使用しており、その恩恵を24時間いつでも受けられるからである。これは渋谷の固有性ではなく、モノと人が密集した数量的な「情報アーカイブ」としての優位性を表しているといえよう。

ARゲームとしての「ポケモンGO」にとって、現実の風景とポケモンの姿が重なり合うことよりも重要なのは、GPSから取得された位置情報にもとづいて、現実世界を反映したデジタル地図が生成される点である。「ポケモンGO」のデジタル地図は、2005年にリリースされた「Googleマップ」をもとにつくられており、自然の高低差や人工のランドマークはすべて捨象され、道路だけが強調される。

したがって「ポケモンGO」のデジタル地図には、それぞれの土地に固

IN JAPAN FESTIVAL」を主催しているロックン・グ・オン社は、『rockin'on』や『ROCK'N'ON JAPAN』などの雑誌を発行している音楽系の出版社である。しかし同社は、出版不況が深刻化していった2000年代を通じて、イベントの企画・制作・運営の事業規模を急速に拡大していた。雑誌販売の10倍以上の売上を「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」だけで獲得しているという試算もある(2)。

それに対して、主催者や出演者による宣伝から、参加者の事前準備、そして事後の交流にいたるまで、フェスの隆盛を支えているのはインターネットの存在である。今では会場内にSNS映えするフォトスポットも不可欠だ。ネットの普及とフェスの成長は足並みを揃えており、ネットがフェス体験を拡張したといっても過言ではない。だからといって、SNSに媒介された日常的なつながりに参加経験が規定されるわけではなく、そこから一時的に切断された、瞬間的な共同性や解放性が感じられることもある。多くの参加者は会場で、フェス仲間たちと付かず離れず、ゆるくつながっている(3)。

このように、人びとは決して音楽ソフトを聴取する代わりにフェスに行くわけではない。フェスに限らず、たとえばスポーツ観戦やアニメ聖地巡礼といった現象も、マスメディアや文化産業が依然として重要な役割を果たしている反面、ネットが多重的に媒介しているイベントであり、参加者の多様な関わり方を包摂してくれる。

さて、こうしたイベントが多方面で社会化していくなかで、広告都市としての固有性を失ったはずの渋谷は、今なお特別な街であり続けている。なぜかといえ、2002年の日韓共催FIFA

有の歴史や文化などは書き込まれていない。スマートフォンのかなに映し出された世界に没入することで、現実の場所に存在する他者に対する認識、周辺環境からの働きかけに対する理解が希薄化しかねない。その結果、リリース当初、プレイヤーに対するマナー遵守が周知されたり、場所によってはプレイ自体が禁止されたりするなど、一時期は現実世界との不調和も目立った(7)。社会学者の松岡慧祐の言葉を借りれば、「ポケモンGO」は、「通常の地図にはないゲーム性によって身体移動が誘発される一方で、地図から『意味』が剥ぎとられ、世界を解読するテクストとしての可能性が閉ざされてしまっている」。それにもかかわらず、実際には地方自治体などがこれを観光振興に活用する取り組みをおこなうことで、デジタル地図から捨象された場所性をかろうじて補完している(8)。



ハロウィン当日の渋谷スクランブル交差点 (2018年)。
撮影／Dick Thomas Johnson



セカイカメラによるキャンペーン「渋谷で恋するメッセージ——AR 恋文横丁」(2010年)のデモ画面。バレンタインの季節に合わせて用意されたハート型の「エアタグ」(上)を開くと、ユーザーが書き込んだメッセージなどが画面上に現れる(下)。写真提供／早川大地

プレイヤーがいる場所の本来的な意味とは無関係にゲームが成立している点は、冒頭で挙げた事例と共通している。このように現在のAR技術の多くは、それが利用される空間に備わった場所性や地域性を拡張するのではなく、むしろそれに情報を上書きするかたちで、新しい現実を構成している。

もうひとつのAR元年 ——「セカイカメラ」と「AR公共圏」

しかし過去を振り返れば、AR技術には別の可能性も開かれていた。

というのも約10年前、2009年も日本では「AR元年」と呼ばれていた。2008年に国内での販売が始まったiPhoneが急速に普及するなかで、「セカイカメラ」がARブームの火付け役となった。頓智ドット株式会社が手掛けたスマートフォン向けアプリで、2009年9月に一般公開された。スマートフォンの画面上には、カメラ

セカイカメラが人気を博した2009～10年は、Twitterの利用者が世界的に急伸していた時期であり、GPSと連動したSNSであるFoursquareも流行していた。Foursquareは、自分がそこにいたことのログを残し、コメントも投稿できる。多くの人がびとがTwitterと連携して利用していた。たくさんの場所にチェックインすることで、得点やバッジを集めることができるというゲーム性も相まって人気を博した。

セカイカメラもFoursquareも当時、スマートフォン自体の目新しさも手伝って、私たちに新しい都市経験をもたらした。それから約10年のあいだに、ARを提供するサービスは多様化した。ショッピングやグルメなどの商業圏において、それぞれ個人の趣味や嗜好によってセグメント化されており、都市空間のなかで互いに衝突することは滅多にない。ARは新しい公共圏を指向するものではなく、あくまで親密的な人間関係の範囲内で、快適かつ無難に享受されるようになったといえよう。

異なるものをつなぐ拡張現実の可能性

ところで前出の南後は、商業施設における広場の変容という視点から、渋谷パルコの歴史を再検証している(11)。渋谷パルコの最上階には西武劇場(現・PARCO劇場)がつくられたが、パルコを率いた増田通二〔*2〕が、劇場をやれば必ず成功するという確信を抱いたのは、1969年12月に唐十郎が率いる状況劇場と寺山修司が率いる天井敷〔*3〕が、渋谷で起こした乱闘事件が契機だったという。都市のなかでハプニング的に繰り広げられていた、反体制的な前衛演劇のダイナミ

で捉えた現実の風景に、「エアタグ」と呼ばれる付加情報が重ねて表示される。エアタグは文字・写真・音声で、利用者は誰でも閲覧でき、自由に投稿できる。後年のAR技術に比べると、ユーザーがいる場所そのものを楽しむことにこだわったアプリだった。スマートフォンのカメラを撮影以外の用途、すなわちARに転用できることを提示した点でも先駆的だったといえる。

それに先立って2009年6月には、セカイカメラの革新性に後押しされるかたちで、「AR空間の公共圏を巡る啓蒙および研究、実証実験などを実施、支援」(9)するディスカッション推進プラットフォームとして、「AR Commons」というコンソーシアムも設立された。そのキックオフイベントで、頓智ドットの井口尊仁CEO(当時)は次のように語っている。

街というのは、生きて行く場としての暖かいスフィアでもあります。家族に限らず、その界限の人たちとのコミュニティを可視化する。そういうった働きをエアリアルは可能にします。そのようなエアアールの働きかけは、初めて訪れた場所をまるで普段住んでいるかの様に感じさせてくれる筈です。

その場所がもっている機能や便利不便利、氣候や風土、息づかいや機微を伝えてくれる事で、一見さんではなかなか得られない体験を得ることができます。

ズムに触発されたわけである。

そもそも「パルコ(PARCO)」とは、イタリア語で「広場」や「公園」を意味する。南後によれば、増田が目指した広場とは、「国家や行政の公領域におさまるものでもなければ、民間の利己主義的な私領域におさまるものでもなく、それらが交わる共領域である「コモン」の発想を先取りするものだった」という。また、パルコを含むセゾングループを率いた堤清二(辻井喬)〔*4〕も、市場経済にもとづく自由主義社会がもたらす幸福のあり方に懐疑的で、消費社会の進行にともなって、異質な他者に開かれた中間的な共同体が消滅することを憂いていた。

それにもかかわらず、1970年代は『anan』や『non-no』などのファッション誌、『ぴあ』などの情報誌が相次いで創刊され、若者の趣味や嗜好が小集団にセグメント化されていった時期でもある。皮肉なことに、そうした時流に乗って成長を遂げたパルコ自体、消費社会を象徴する存在と目されるようになった。

こうしてみると、今から約10年前、セカイカメラが牽引していた「AR公共圏」という展望は、初期の渋谷パルコが追求していた「コモン」の発想と重なって見える。パルコが60年代の都市におけるハプニングに触発されていたように、初期のAR技術もまた、モバイルメディアに媒介された新しい都市経験の台頭を視野に収め、そのダイナミズムをそっくり取り入れることを目指していた。フェスやハロウィンが参加者の多様な関わり方を許容してくれるように、ARを介して異質な他者が出会ったり、異なる見方がぶつかったりすることで、価値ある反応が生まれる契機になるはずだが、その実現の兆しはまだ見えない。しかし、

たとえば、僕自身の田舎、近所に前方後円墳があったり、鎌倉期の古仏があったり。そういうことを他人に伝えようと思ってもなかなか難しいのですがエアアールを使う事で簡単に伝達できます。エアアールのこういった働きは特に海外ではパワフルだと思います。通貨、作法、習慣、食事、社会的ルール、交通法規などあらゆる違いのある海外ではエアアールによる情報の強化は、とても役に立ちます。(10)

渋谷では2010年の1月から2月にかけて、セカイカメラによる「渋谷で恋するメッセージ——AR 恋文横丁」というバレンタイン向けのイベントも展開された。恋文横丁という名称は、丹羽文雄〔*1〕の小説『恋文』に由来し、1953年に映画化もされている。朝鮮戦争の頃、東京近郊の駐留アメリカ人兵士に日本人女性が英語で恋文を書くのを手伝う代筆業者が、現在、渋谷109が建っているあたりに存在していた。この横丁は1965年に焼失しており、それをバレンタインの季節にARで復活させようというコンセプトであった。イベント期間中、渋谷109周辺にはハート型のエアタグが特別に用意され、ユーザーが恋愛成就を祈願するというわけである。

ところが翌年以降、セカイカメラの人氣は急激に失速し、2014年1月にサービスを終了した。セカイカメラがうまくいかなかった理由のひとつは、ユーザーの投稿したエアタグが増殖し続け、うまく整理できなかった点にある。誰でも自由に投稿できるがゆえに、その整理や管理のあり方が運営上の難題だった。ARの公共圏はいかにあるべきかという理念的な問いは、それゆえ実践的な課題でもあった。

以上のような歴史認識を踏まえることで、これらのARの可能性を、より拡張して捉えることができるだろう。異質なものととの出会いはいっだってハプニングから始まるのだから。

注

- *1 1904～2005年。小説家。東京の町々を舞台にした恋愛・風俗小説を多く書く一方、後年は『親鸞』『蓮如』などの宗教を題材にした作品も執筆した。
- *2 1926～2007年。パルコ元会長。彼が採用した「すれ違う人が美しい——渋谷＝公園通り」のコピーは一世を風靡した。
- *3 状況劇場、天井敷数はいずれも「前衛」「アングラ」と呼ばれた演劇集団。69年の乱闘事件は、寺山が状況劇場の興行初日に葬式用の花輪を送ったことに対する、唐たちの「報復」としておこなわれ、双方合わせて9人が逮捕された。
- *4 1927～2013年。セゾングループ元代表。独自の「感性経営」を掲げ、同グループの躍進の先頭に立つ。辻井喬の筆名で小説などの著作も多数。

参考文献

- (1) 北田曉大『増補 広告都市・東京——その誕生と死』(ちくま学芸文庫、2011年)を参照。初版は2002年。
- (2) レジー『夏フェス革命——音楽が変わる、社会が変わる』(ブループリント、2017年)。
- (3) 永井純「「音楽フェス——インターネットが拡張するライブ体験」飯田豊・立石梓子編著『現代メディア・イベント論——パブリック・ビューイングからゲーム実況まで』(勁草書房、2017年)。
- (4) 三浦展・藤村龍至・南後由和「商業空間は何の夢を見たか——1600～2010年代の都市と建築」(平凡社、2016年)。
- (5) <https://shibuya-arphoto.jp/>
- (6) <http://buzz-plus.com/article/2016/10/15/pokemon-go-shibuya/>
- (7) 神田孝治「新たなモバイル・ハイブリッド——ポケモンGOが生み出した虚構と現実の集合体」神田孝治・遠藤英樹・松本健太郎編『ポケモンGOからの問い——拡張される世界のリアリティ』(新耀社、2018年)。「ポケモンGO」の特徴のひとつが、場所の固有性から乖離した拡張現実であることは、同書のなかで複数の執筆者が指摘している。
- (8) 松岡慧祐「デジタル地図を遊ぶレイヤー——グーグルマップからポケモンGOへ」神田・遠藤・松本編、前掲書。
- (9) <https://blogs.itmedia.co.jp/katabami/2009/06/ar-commons-a3a.html>
- (10) <https://roadracer.hatenadiary.org/entry/20090711/1247241743>
- (11) 三浦・藤村・南後、前掲書。

鬼つ子「右横書き」とその時代 ――縦書き専用だった日本語が縦書き・横書き両用となるまで――

漢字・カタカナ・ひらがなといった独自の書字文化をもつ日本。

本来、日本語は「縦書き」に適したものととして発展を遂げてきたが、江戸後期には「横書き」というまったく異質な書字文化に遭遇する。

現在の「左横書き」が主流の時代となるまでに、反発と模倣、さまざまな試行錯誤があった事實は、あまり知られていない。

だが、そのユニークな遭遇史は、異質なものととの出会いを新たな創造につなげる文化的プロセスの良き見本として、現代にも役立たせるのではないだろうか。

やないけ・まこと
慶應義塾大学文学部教授。1957年、東京都生まれ。1985年、東京大学大学院博士課程中退。昭和女子大学専任講師、大阪女子大学専任講師、東京女子大学助教授、同教授を経て現職。専門は日本語学。おもな著書に『横書き登場――日本語表記の近代』（岩波新書）、共著に『上方ことばの今昔』（和泉書院）などがある。

近代以前の日本の 「二行一字の縦書き」表記

日本語を使うわれわれにとって、文字を縦書きにも横書きにもできることは、ごく当たり前のことにすぎない。しかし、縦書きする英語などというものがなく（縦長の看板などに見られる「見縦書き」のように見えるものは、一行一字の横書きである）ことからわかるように、世界的にはこうした自由のきく言語はきわめて稀なのである。

実は日本語が縦書き・横書き両用になったのも、わずかここ百数十年のことにはすぎない。日本語は古来縦書き専用だったのだが、左から書いていく横書き（以下、「左横書き」とよぶ）を使う欧米の言語との出会いによって、横書きという新しい様式をもつに至ったのである（日本語同様に現在縦書き・横書きどちらもできる中国語や朝鮮語も、もともととは

縦書き専用で、近代の日本語の事例に触発されて横書きが始まったものである）。

こういうと、「いや右から書いてゆく横書きなら昔からあったのでは」と思う人も多いのではなかろうか。欄間の扁額などによく見られる、図1のような書き方である。図1は江戸時代初期の禅僧沢庵の筆になるもので、右から「無一物」と書かれている。実はこれは横書きではなく、一行一字の縦書きなのである。紙の幅いっぱい大きな文字が書かれているので、縦書きの一行に一字しか入らず、左へ進むのは行が移ってゆくからなのである。字が小さく書かれて、縦方向にも二字以上文字を入れる余裕があれば縦書きされることは、図1の左端の署名に見られる通りである。

こうした例が、横書きではなく、確かに「一行一字」の縦書きであることは次のような点からも知ることができる。図1のようなくずし字は、当

時つづけ書き（「連綿」という）されるのが普通

だったが、連綿は行の内部でだけ起き、行をこえて前の行末と次の行頭が連綿することはない。図1がくずし字でありながら連綿していないのは、隣り合う文字がそれぞれ別の行に属しているからなのである。また、「々」のような繰り返し記号は、江戸時代には行の頭には置いてはいけないことになっていた（いわゆる「行頭禁則」である）。図1のように水平方向に一字ずつ並んでいる書では、同じ文字が続く場合も同じ字が繰り返し書かれ、決して「々」はもちいられないのだが、これもそれぞれの字が別の行の先頭だからである。

特殊な例ではあるが、文字を連ねて絵を描いてゆく「文字絵」（図2『法華経宝塔曼荼羅図』）でも、当時は水平方向を描くのに横倒しになった縦書きをもちいていた。これもまだ横書きがなかったからにはかならない。

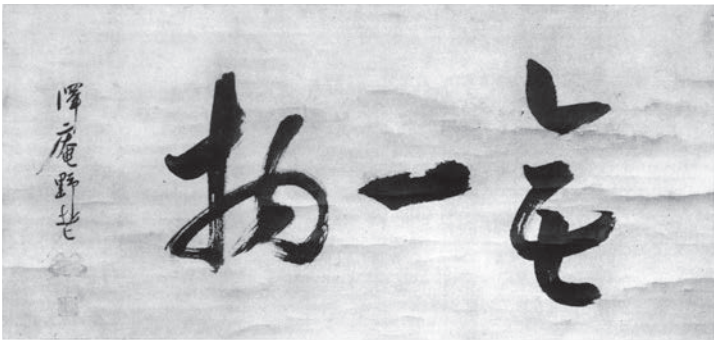


図1：禅僧沢庵の筆
禅僧である沢庵宗彭（たくあんそうほう）筆による横長扁額。「無一物（むいちもつ）」と右から横書きで書かれているように見えるが、実は一行一字の縦書きである。

図2：『法華経宝塔曼荼羅図』
法華経の経文で塔を描いているが、縦の線は縦書きで書かれ、横の線は90度文字を倒して縦書きされている。所蔵／長栄山妙法寺（堺市博物館）

文字を理解するために必要不可欠な 文字配列方向（書字方向）

縦書き、横書きのように、文字を並べ／読んでゆく方向を「文字配列方向（書字方向）」という。われわれの言語は、口や喉を使ってつくり出される音声をもちいているが、この音声器官はラッパ（金管楽器）のようなしくみで音を出すため、複数の音を同時に発することができず、言語は音が時間の順に一列に並ぶというかたちをとらざるをえない。

しかし、言語はこの制約を逆手にとって、この「順序」の効果を最大限利用している。a k i と k a i と i k a はみな同じ音の組み合わせでできているのに、それぞれ別の意味を表しているし、文の順を逆にしても「大洪水がおきた。ダムが決壊した」と「ダムが決壊した。大洪水がおきた」では、因果関係がまったく逆になってしまう。音声言語の場合は、聞こえてくる音の順がそのままの順序になるので、聞き取ってさえいけばそれで言語として理解できるのだが、文字を読む場合は、すでに書かれて平面上にある文字を目にすることがほとんどである。

われわれのすぐれた視覚は書かれた文字を一遍に見て取ることもできるが、それでは言語として理解できない。読む人が一定の順序で文字をスキャンし、順次読み取ってゆくという積極的な行為により時間の流れをつくり出して初めて、言語の順序性が復元され、理解が可能になるのである。その読み取りの順序を伝える方法のなかで一番簡便なのが、文字をあらかじめ一列に並べておいて、読み取りの起点とそこからの進行方向とを社会的に約束しておくことなのである。これが

「文字配列方向（書字方向）」という規則である。文字・表記にとって最重要の規則だから、これを安易に変更することはできない。世界の言語がひとつの方向に固執しているのはそのためなのである。

縦書き専用だった日本語が、縦・横両用になったということがどれほど稀有なことなのか、おわかりいただけただろう。

西欧語との出会いによる さまざまな試みと葛藤

日本語が横書きできるようになったのも、日本語自身の自律的で自然な変化によるものだったわけではない。近世末期からの、左横書きする西欧語との出会いという、言語外の要因によって生じた変化だったのである。

西欧の文化・学問・技術などが学ぶに値しないものなら、この出会いも出会いだけで終わっただろうが、産業革命後の科学・技術や国民国家という国制、市民革命を経ての合理思想などは当時の日本にとって大いに学ぶべきものだったから、まず、それらの勉学の基礎となる外国語学習の場で、左横書きする外国語と縦書きする日本語をどう共存させればよいかが問題になったのである。

外国語より、日本語の訳語や説明の方が多くを占める単語集のようなものでは、縦書きの日本語に合わせるため左横書きの外国語を右へ90度横転させればよかったが（29頁図3『改正増補蛮語箋』1857年刊）、本格的な対訳辞書では外国語は見出しのみならず例文などにも多くもちいられるので、むしろ外国語の方を主体としてあつかう必要がある。訳語の日本語は、狭い欄に小さな字で押し込んだり（29頁図4『波留麻和解』写本1796年成立）、左

へ90度横転させて外国語の方向に合わせたり（図5「ズーフ・ハルマ」写本（『道訳法児馬』1833年完成）、さまざまな試みが行われたが、いずれも従来の縦書きを保ったままでの工夫であり、西欧語にそろえて日本語を左横書きで書いてしまうことにはなかなか踏み切れなかった。まったく新しい文字配列方向を導入することにはそれほど大きな抵抗があったのである。

洋学者のコミュニティのなかでさきやかに使用される時期を経て、一般向けの書物に左横書きの日本語が現れるようになるのは、かなり遅れて明治になってからのことであった（図6『浅解英和辞林』1871年刊）。ここで生まれた日本語の横書きは、西欧語そのままの、見出しのような短いものも本文のような長大なものもすべて左横書きで書くというものだったが、まだこうした本格的な左横書きは、当時は、ごく限られた場で、すなわち、人でいえば、洋風の教育を受けることができた少数のエリート集団、用途でいえば、左横書きされる西欧起源の文字や記号（数式や楽譜など）とともにもちいる場合に限られて使われたにすぎない。在来の日本語の縦書きは行移りの方向も右から左へだから、左横書きの「左から」という方向性とは何の接点もない。日本語の側に、何の素地もなく受け入れる必然性もない、まったく異なるありかが容易に受け入れられるものではなかったのは当然といえるだろう。

庶民の好奇心が生んだ 西欧語にはない「右横書き」

しかし、日本語の横書きは、西欧の左横書きに出会って、それをそのまま模倣し取り入れるというようなシンプルな道筋ばかりをたどってきたわ

けではない。

最近ではほとんど見かけなくなったが、日本語には左横書きだけでなく、右から左へ進む横書き（以下、「右横書き」とよぶ）もあった。西欧語には右横書きはないから、これはそこから取り入れたものではないし、もちろん縦書き専用時代の日本語にも存在していなかった（先に述べた日本に古くからある一行一字の縦書きと異なり、右横書きは三行以上になっても横に書かれてゆく）。アラビア語やヘブライ語は右横書きされるが、これらの言語はもちろん当時の日本語とは無関係である。

興味深いことに、この日本語の右横書きも、左横書きとほぼ同時代に、同じように西欧語の横書きとの接触によって生じたものなのである。西欧語の左横書きと日本語の縦書きとの接触は、西欧語にならった左横書きを生み出したばかりか、左横書き・縦書きどちらとも似つかない第3のタイプ、右横書きを生み出していったわけである。

このいわば「鬼っ子」が生み出されたのは、言語外の要因と言語側の要因が複合して働いたからである。外部の要因というのは、鎖国時代の庶民が抱いた異国の文化への好奇心である。そうした庶民の好奇心にこたえるかたちで、エキゾティシズムが流行となり、浮世絵の世界などでは、その意匠として、遠近法をもちいた描写などと並んで、絵のなかに横文字をまねて記すことが行われたのである。

江戸時代のおわりには、外国では文字を横に書くことがあるということは庶民に至るまで広く知られていたし、すでに「横文字」ということばも存在していたのである。本来連綿しないはずの一行一字の縦書きを連綿させて西欧語の筆記体をまねてみたり、縦書きを横転させて横書きのよう

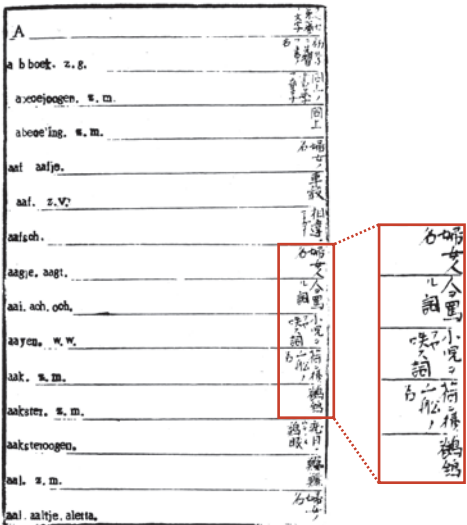


図4：江戸時代の蘭和辞典『波留麻和解』

写本 寛政8 (1796) 年成立

日本最初の本格的な蘭和辞典。左側のオランダ語に対し、右側の日本語の訳語は、左へ行移りする縦書きのまま小さな文字で詰め込まれている。

所蔵／東京大学総合図書館

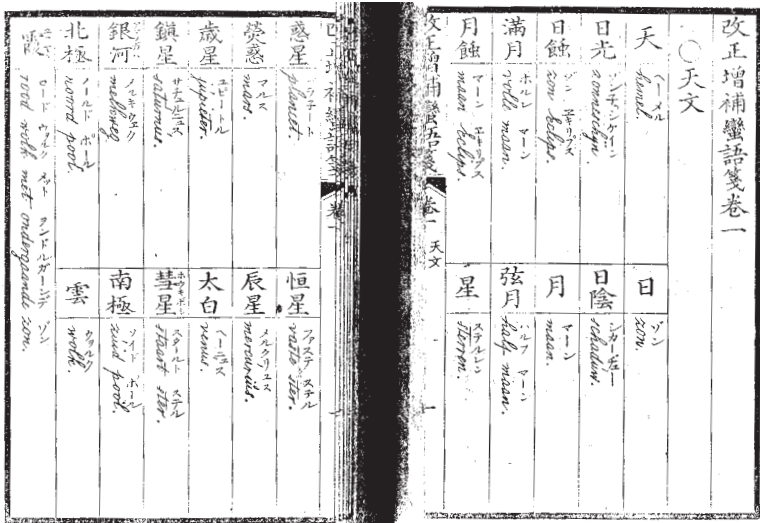


図3：『改正増補 蛮語箋』

安政4 (1857) 年刊

（大阪府立大学図書館『日本蘭学英学資料』コレクションより抜粋）

江戸後期から幕末にかけて刊行された意義分類体の日本語・西洋語対訳単語集。基本となる日本語にオランダ語を対訳させているが、横書きのオランダ語を90度倒し縦にして、読み仮名を縦書きに配している。

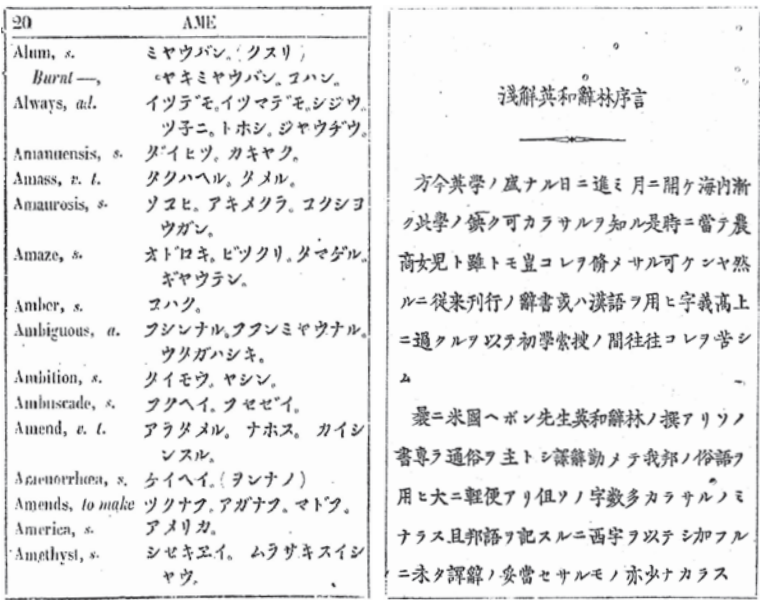


図6：最初に公開された左横書き『浅解英和辞林』

明治4 (1871) 年刊

左横書きで最初に出版された語学書だが、内容的にはヘボン式ローマ字で名高いヘボン編の和英辞典『和英語林集成』などの焼き直しのようなものだった。序言を書いた内田晋斎は、当時文部省編集寮の役人だった。

所蔵／国立国会図書館

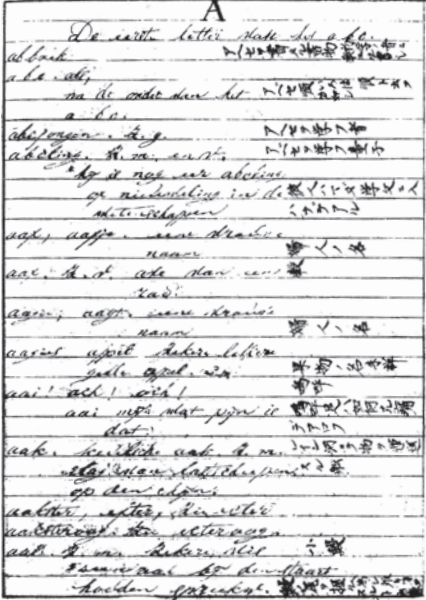


図5：江戸時代の蘭和辞典『ズーフ・ハルマ』

写本（『道訳法児馬』） 天保4 (1833) 年完成

図4の『波留麻和解』と並ぶ、江戸時代蘭和辞典の二大系統の祖となる辞書。欧語との共存をはかり登場した新しい書字方向「横転縦書き」で書かれている。

所蔵／静嘉堂文庫

に見せかけたり（30頁図7 葛飾北斎『たかはしのふじ』1804（11年頃）、いろいろ新奇な試みが行われるなかで、開国を機に始まった再度の異国趣味流行の時期に、日本語の文字を横に並べることが行われるようになったのである（30頁図8 歌川貞秀『亜墨利洲遊覧波尔尼亚港出帆之図』1862年）。

しかし、当時の一般の庶民は、本格的に西欧語を学ぶ機会はなかったから、西欧語の横書きが左から書かれるものとは知るよしもない。そこで、よく見知っていて、横書きと見かけが似ている、古くからの一行一字の縦書きにならって右から左へ文字を並べ、右横書きを生み出したのであろう。これなら、初めて見る人も容易に読むことができる。右横書きを生み出したふたつの要因のうち、日本語側の要因というのは、当時広く普及していた、この一行一字の縦書きというものの存在なのである。

「縦書き」「右横書き」併用から さらに「左横書き」も受け入れ現代へ

ただ、こうした新しいものの好きの流行などは長続きするものではない。その後、改めてこの右横書きが広く定着するに至ったのは、明治の新時代になり、時の政府が通貨や交通・通信など近代国家の骨格となる制度を欧米にならって導入した際、そのハード面もソフト面も丸のまま継受したことが大きく関わっている。貨幣（30頁図9 新貨条例による二十円金貨1871年、鉄道切符（30頁図10 初期の乗車券1871年、郵便切手（30頁図11 皇米郵便交換条約に基づく外国郵便用切手1875年）などは、製造方法や大きさだけでなく、横書きの書式まで西欧式そのままに取り入れられたからである。ただ、これらの制度は国民みなが利用するものだから、エリー

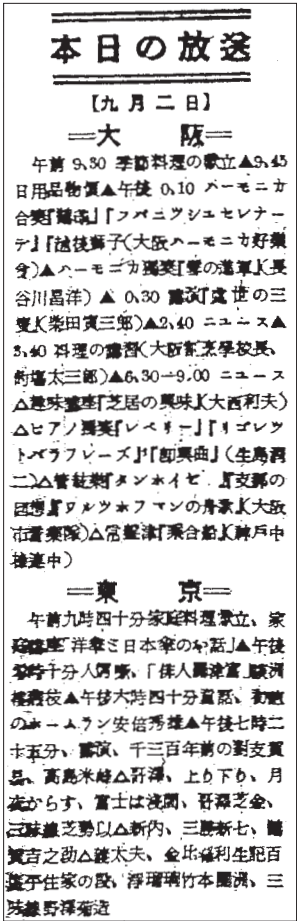


図12：『大阪朝日新聞』1925年9月2日
大正末期から昭和初期、1920年代には、新聞記事にも「左横書き専用スタイル」が進出。見出しだけでなく記事も横書きだが、同じページで他の記事は「縦書き（右横書き併用）スタイル」で書かれていた。天気予報やラジオ欄などが左横書きになり、ジャンルによってスタイルを使い分けていたようだ。



図13：『神戸新聞』1928年1月1日朝刊
神戸新聞では、1928年1月から29年2月まで、見出しやキャプションを左横書きにし、本文を縦書きにした「縦書き（左横書き併用）スタイル」（ただし、欄外の題号や発行日などは右横書きのまま）を採用している。このような折衷スタイルを全面的に採用する新聞記事は、この時期ではまだ稀だった。

トしか読めない左横書きでは困る。みなが読める方向として参照されたのは、やはり一行一字の縦書きだったので、これらにも右横書きが採用されることになったのである。ここでもやはり内部要因と新たな外部要因の双方が働いたわけである。

さて、この右横書きは、左横書きとは異なり、ほとんど抵抗なく、広く各層に急速に普及していった。それを可能にしたのも、日本語の側の内部事情であった。従来からの縦書きは横長のスペースで使うには不向きであり、そうした用途に向く文字配列方向が求められていたのである。右横書きはちょうどうまくそこにはまり、縦書きを補完し、縦書きとともにひとつのシステムをなすものとして受け入れられたのであった。右横書きは、左横書きのようにそれだけですべての用途にもちいられる自立した横書きではなく、縦書きと共存して、縦書きの苦手とする横長見出しや図版キャプションなどを分担するものであり、この性格は右横書きが衰退するまでとうとう変わることはなかった。もともと縦書きが存在しない西欧語の横書きには当然、こうした役割はなかったのだから、縦書きを補完するこのようなありかたは、日本語の右横書きが初めてその道を拓いたものといえる。

一方、左横書きの方はというと、その後も西欧的知識の有用性は高まるばかりであったから、大正時代以後、教育の充実・普及に伴って、使用者の面でも、左横書きに触れる機会をもつ国民が増え、用途の面でも、左から書かれる文字や記号と併用される場合に限られず、科学・技術や欧米文化に結びつくイメージのある用途には広くもちいられるようになってきていた（図12『大阪朝日新聞』1925年9月2日）。こうした外部事情の変化によって、これまで地味な存在であった左横書き専用という方式も、いつのまにか縦書き・右横書き併用という主流の方式に十分拮抗できる勢力に育ってきていたのである。

とはいえ、このふたつの方式はそれぞれ異なる用途を分担していたから、当時は同じ新聞の同じ紙面で、左横書きと右横書きという、方向がまったく逆の横書きが併存していても違和感なく受け入れられていた。

しかし、昭和に入る頃から、次第に、同じ紙面に同じ横書きで向きが逆のものが併存するのは不自然ととらえる傾向も現れてくるようになる。縦書きを補完する見出しやキャプションなどでも左横書きをもちいるもの（図13『神戸新聞』1928年1月1日朝刊）と、従来からの右横書きをもちいるものとがぶつかりあうことになったわけだが、戦前の左横書き・右横書き入り乱れての混乱や、戦時には、右横書きを一行一字の縦書きと混同して日本伝統の方式ととらえた国粋主義者が、欧米イメージと結びついた左横書き排除に動くなどの紆余曲折を経て、現在では左横書きにほぼ統一されるに至っている。

現在の日本語の左横書きは、このような経緯で、縦書きの文章とも一緒に使え、レイアウト、デザイン上の自由度がきわめて大きいという点で、左横書きだけで使う西欧のものとは大きく異なるものになっている。

異質なものの出会いのなかから生まれ出た「鬼っ子」、右横書きは短命であったが、しっかり貴重な遺産を今に遺しているのである。



図7：葛飾北斎『たかはしのふじ』
文化前期（1804～11）頃
銅版画風のタッチと極端な遠近法で洋風をアピールした作品には、絵の題と署名「ほくさゐかく（北斎描く）」の縦書きを横転させ、欧字の筆記体をまねてつづけ書きをしている。所蔵／房総浮世絵美術館



図8：歌川貞秀『亜墨利迦洲迦爾波尔尼亜港出帆之図』
文久2（1862）年
開国による異国趣味の影響が顕著に見られる横浜浮世絵。題名が右横書きで2行で記されている。所蔵／神奈川県立歴史博物館



図11：皇米郵便交換条約に基づく外国郵便切手
近代郵便は明治4（1871）年に創業されたが、当時は金額が縦書きで入っているだけのものだった。横書きになったのは、明治7（1874）年公布の「皇米郵便交換条約」実施の翌年、十二銭・十五銭・四十五銭の外国郵便切手からだった。



図9：日本の近代貨幣の第一号、二十円金貨
明治4（1871）年に発行されたが、西欧式にならない横書きで額面・国名・発行年の表示がされている。

図10：日本の鉄道創業時の一等片道乗車券
鉄道創業に向けイギリスの援助や指導を多く受けていたため、明治4（1871）年の最初期の乗車券には、表面に日本語と英語、裏面は英仏独の3か国語が横書きで表示されている。所蔵／天理大学附属天理参考館

長崎の食文化に見る「異文化結合」――遭遇と受容の最前線で何が起こったか？

赤瀬浩
AKASE HIROSHI

異なる分野の結びつきなかで、最も身近なのが食文化に関するものだ。特に地域ごとの伝統食は、それぞれ独特の「異文化結合」の背景をもち、その豊かさが国内はもちろん海外でも大きな注目を浴びている。数十年、数百年のスパンで、それはどのように成立したのだろうか。本稿では、日本各地の食文化でも、海外との影響関係が色濃い「長崎食」に注目、長い時間を通じたその選択と吸収の歴史をひも解き、異文化結合のひとつのあり方を検証する。

あかせ・ひろし
長崎市長崎学研究所長。1961年、長崎県長崎市生まれ。長崎大学教育学部卒業。上越教育大学大学院修了。長崎県内小学校に教員として勤務。2018年より現職。主な研究対象は江戸時代長崎町人の生活史。主な著書に、『鎖国下の長崎と町人』（長崎新聞社）、『株式会社「長崎出島」』（講談社選書メチエ）、『弥太郎の長崎日記』（河津祐邦）（ともに長崎文献社）など。

「和華蘭葡」の世界

元亀2（1571）年の開港から今日まで、長崎で育まれてきた独特の生活様式や祭りなどを「和華蘭文化」と称している。和は日本、華は中国、蘭はオランダ。3つの要素が混在するカオスⅡ「わからん」とかけている。

江戸時代、長崎では唐人、オランダ人たちが町の住民として生活していたため、彼ら異国のさまざまな文化が浸透し、模倣や融合という形で人々の生活に取り込まれていた。

しかしながら、長崎独特の文化は、出島や唐人屋敷での異国の人々との交流だけでなく、いわゆる鎖国以前のポルトガル人たちとの交流、唐人屋敷ができるまでの唐人たちとの交流が基底にあることに特徴がある。

ポルトガル人たちは、日本列島西果ての僻地に

拠点となる要塞を築いた。そのことを長崎では開港ととらえている。その要塞が発展して長崎となった。彼らは長崎市中の家々に住民たちと同居する生活を送っていた。その期間がおよそ60年。キリスト教禁教政策の実施で、彼らは国外に追放された。その時、ポルトガル人と日本人との間に生まれた子供たち数百人も追放となった。

また、唐人屋敷が築かれて唐人たちが町外れの一面に隔離されるまでの約120年間、唐人は長崎の住民として普通に暮らしていた。

ポルトガル人、唐人と共棲していた経験が今日の長崎の生活様式や文化の根底にある。語呂は悪いが「和華蘭葡」が長崎の食文化を見るためのキーワードである。

ボーダーとしての長崎

『延宝版長崎土産』（1681年）という長崎丸山

外国人同然の珍奇なものであったろう。旅人が特に興味をもったものが食。日本でありながら外国の影響を受けた長崎の食を通し、当時の人々はあ

こがれであった日本と外国のボーダー「長崎」を理解しようとしたのであった。

南蛮船が運んだ西洋の味覚

天文12（1543）年盛夏。種子島に上陸した初めての西洋人を見た人々が、彼らを南蛮人と呼んだ。黒髪で体格もそれほど大きくないポルトガル人であった。彼らは鉄砲を伝えた者として記録されているが、その後我国に渡来する西洋人の先駆けとなった。やがて、西洋の新しい宗教とともに新しい食文化が持ち込まれた。

南蛮の人々と日本人との間で生活上大きな障壁となったのが肉食であった。それまでの日本人が全く肉食しなかったのではなく、牛馬を食する習慣がなかったのである。宣教師フロイスが記録した『日本史』に、「汝らは何ゆえ馬や牛を食べるのか」と豊臣秀吉から詰問されたという記述がある。「馬は荷物を運び戦に使い、牛は農民が耕作に用いる道具である」として、鹿、猪、キツネ、キジを飼育して食べればいいではないか、牛馬を食してはならないと（もっとも、南蛮でも馬を食べる習慣だけはなかった）。

鹿、猪などの今でいうジビエは、我国でも古くから食されてきた。それは、飼育ではなく狩猟として、天からの授かりものという幸運の恵みであるため、常食に発展しなかった。常食するためには飼育が容易で個体の大きい牛馬の方が効率がいい。一方、西日本の浦々にやってきた中国船が持ち込んだ豚は抵抗も少なく、日本の食材に加えら

れた。

食は文化摩擦が起こりやすいデリケートなもので、今日でも世界を見れば食習慣の違いは秀吉の頃とさして変わらない。

では、日本人は南蛮の人々から食の影響を受けなかったのかといえば、決してそうではない。むしろ、受け入れたものの多くがその後日本の食として定着したため、牛肉が例外として目立っていただけなのである。

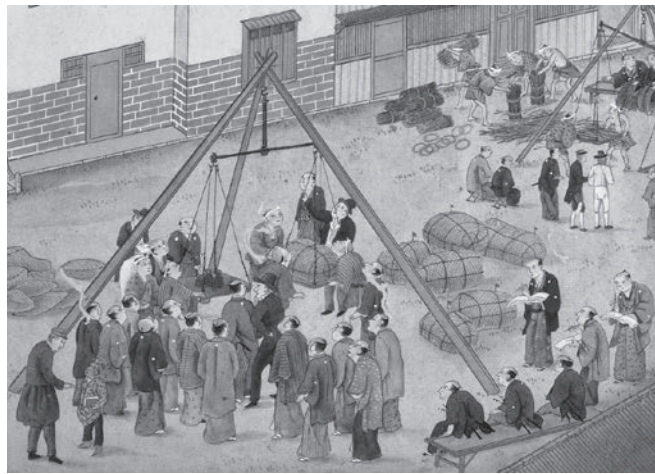
現在ポルトガル語から外来した食物の日本名をあげれば次の通り。「ビスケット」「キャラメル」「かぼちゃ」「カステラ」「コンペイトウ」「天ぷら」「ザボン」「パン」「ポロー」など、今日では立派な日本の食物になっている。

食に浸透する砂糖の甘味

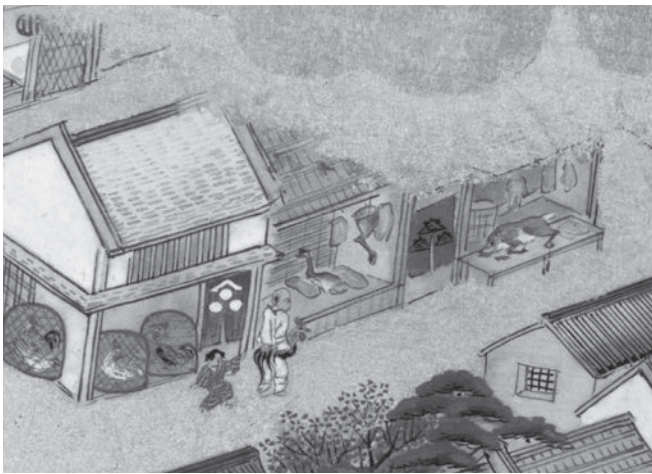
南蛮の人々が持ち込んだ西洋の味覚で、最も衝撃的だったものが砂糖の甘味であった。先にあげた食物の多くが砂糖を使った菓子であることが、一端を示している。

砂糖が国産化されたのは江戸時代中期の18世紀。それまでは全量輸入されていた。古くは遣唐使船が運び、その後、中国との貿易船が細々と運んできたものであった。この貴重な砂糖は専ら滋養の薬として珍重され、料理に使ったり、まして庶民の食卓に上がったたりするものではなかった。

それが、日本人の目に触れるようになったのは南蛮貿易からであった。船底の重しとして石の代わりになり、また保存食をこしらえたり、手っ取り早くエネルギーを補給したりするのに重宝なので、南蛮の人々が運んできたのである。長い航海中は新鮮な果物や野菜が食べられない



外国船が運んできた砂糖は、江戸期以降の長崎の味を決める大きな特徴となっていた。『唐蘭館絵巻』部分。写真提供／長崎歴史文化博物館



南蛮人とともに早くから肉食の文化が入った長崎の町。鶏とともに店先に並んでいるのは、解体された牛や豚の肉だ。『寛文長崎図屏風』部分。写真提供／長崎歴史文化博物館

ので、それらを砂糖に漬けて積載し、水代わりのワインやビールとともに食べた。外洋を渡ってきた南蛮の人々から、お裾分けされ、その甘味に日本人の人々が魅入られたのであった。

カステラとともに長崎のソウルスイーツである「ザボン漬け」は、南蛮船が寄港したセイロン島から積み込んだザボンを航海中に砂糖漬けしたのに始まる。フレッシュな果汁の苦みと砂糖の甘さが和して、時代を超えた味覚が伝えられている。また、「長崎天ぷら」は衣に砂糖をたっぷり練りこんだ料理で、ツユを付けることなく食べる。これも南蛮仕込みであろう。

長崎の「おいしい」は甘味がどれだけ効いているかを測るもので、江戸時代には「長崎イコール甘い」と全国的に認知され、甘味が不足すると「長崎が遠い」と不満を言われたそうである。

通詞たちが運んだ西洋料理のレシピ

江戸時代、長崎の役人には外国人を相手にする職種があった。代表的なものが唐通事とオランダ通詞である。通訳業務が重んじられたオランダ通詞は「通詞」、唐人たちの管理や貿易業務まで守備範囲だった唐通事は「通事」とあらわした。唐通事が格上とされ俸給も高かった。唐通事になれる家系は、唐人屋敷ができる以前に日本人化した唐人を先祖にもつ者たちであった。一方、オランダ通詞は初めポルトガル人の通訳をしていた者、オランダ人が出島に移されてから現地採用された者、唐通事から変じた者など出自は多様であった。唐通事の食卓は元々が唐人であるだけに唐人の食生活に近く、目立った文化的な発見や摩擦はないが、オランダ通詞が目にし味わうことができる

持ち帰ったレシピをもとに江戸でオランダ正月を再現した。

古今東西、人間には新しいもの珍しいものを試し、よければ取り入れて食生活を豊かにしたい欲望がある。オランダ通詞や大槻玄沢たちが出島からレシピを持ち出したのも食への追求という極めて普遍の人間の行為であった。長崎では外国人から直接「本場仕込み」の外国料理を受容し自分たちの食卓に新たな献立を加えていったのである。

「団欒」の文化は長崎から

外国からの食文化として、現在長崎に残る料理に「ターフル料理」と「卓袱料理」がある。面白いことに、ターフルとはオランダ語でテーブルを指し、卓袱とは中国語でテーブルクロスを指す。昔の長崎住民の誰かがオランダ人に向かってテーブルに並べられている料理は何かと問うと、とぼけたオランダ人が家具のことを指すと勘違いして「ターフル（テーブル）だ」と答えたのであろう。



長崎を代表するメニュー、卓袱料理(上)とちゃんぼん(下)は現在も内外の観光客の人気の的だ。写真提供／長崎市水産農林部

オランダ人たちの食卓は日本では経験できない別世界の食文化であった。

高貴な大名たちもまた、出島でのオランダ人の生活に興味をもち、出島移転から幕末まで機会があれば出島へ渡った。

そうした折の貴人の案内もオランダ通詞の職務。まず、カピタン「*1」部屋で葡萄酒や菓子の接待を受け、オランダ人商館員の部屋、薬草園、ビリヤードやゴルフなどを見学し、希望があれば音楽を聴かせ、さらには食事マナーなどを見せた。当時は薬として珍重されたバターなどの食材を買い求める大名もいて、西洋の食に対する好奇心は従来の偏見をのりこえ、オランダ人の食卓への関心は身分の上下を問わず高まっていた。

オランダ通詞たちが貴人を案内し料理の味や作法について解説できたのは、実際にオランダ人たちと会食する機会が多かったからである。例えば、「オランダ正月」と呼ばれる西暦の正月には、出島で祝賀パーティーが開かれる。通詞たちは関係者として招かれ接待される立場になる。

出島の医師ツンベリーの『日本紀行』には、通詞たちの奇妙な会食のさまが記録されている。「料理はすでにヨーロッパ風に設けてあったので、我等の客人は大してこれを味わうことがなかった」とあり、客に呼ばれた通詞たちはせっかくの料理にほとんど手を付けなかったらしい。しかし、各自に盛られた皿は空っぽになっている。この不思議をツンベリーは「彼等はすめられるものを1枚の皿にうつし入れ、この皿が料理でいっぱいになると町に送るからである」と書いている。

通詞たちは、スープやコーヒー以外の料理には口を付けず、そのまま家に運ばせた。家では、到着した料理を小分けにして多人数で味わったが、

一方、また長崎のある住民が唐人に向かって卓の上の料理を指し同様に尋ねると「卓袱(テーブルクロス)だ」と答えたという。尋ね方が悪かったのか相手が勘違いしたのか今では知りようもないが、それ以来西洋料理をターフル料理、中華の影響を受けた長崎料理を卓袱料理と呼んでいる。

江戸時代、長崎以外の一般的な日本の家庭では箱膳を使った個の配膳で食事を摂っていた。今日でも高級な旅館での豪華な食事は箱膳であることが多い。一方、長崎ではオランダ人のテーブル、唐人の卓どちらも大皿で配膳したものを取り分ける食事の仕方が住民の中に広がっていた。卓袱台と呼ばれる丸膳に大皿で盛った料理が出され、各々が自分の箸で取り分けて食べる。食事というのは個で摂るという長年の習慣が、長崎では、卓を囲む、集団で食べるという画期的な変化が起こった。

明治になり近代化が進む社会のなかで、西洋のテーブルマナーが取り入れられた。テーブルにターブルクロスを敷いて、給仕を受けた料理をナイフとフォークで食べる。出島のオランダ正月での光景をほうふつとさせるような食文化が文明の名のもとに取り入れられた。その影響がやがて家庭の食卓に卓袱台を用いさせるようになり、食卓を囲む「団欒」が始まることになった。長崎で受容した異文化は、今日ではスタンダードな食文化として我国に定着しているのである。

ちゃんぼんの居場所

長崎を訪れる旅人が一度は口にするのが「ちゃんぼん」。この不思議な料理にはメニューに用いる漢字表記がない。それは、中華料理ではなく和



オランダ商館での食事の様子。こうした料理を目にすることができた日本人は、オランダ通詞などごく限られた人々だけだった。『唐蘭館絵巻』部分。写真提供／長崎歴史文化博物館

当然材料や味などを観察して、後日自分たちが再現できるように記録した。また、「出島くずねり」と呼ばれた出島の料理人も役人の端に位置していたので、調理法を手に入れることもできた。このように、通詞たちの持ち出した料理のレシピが長崎の人々の食卓に伝わって、新たな長崎料理が誕生していった。

江戸の蘭学者・大槻玄沢がオランダ正月に参席する機会を得て、食した料理を『紅毛雑話』(1787年)に残している。一部をあげれば○パスティー ソップ(すましの如き塩したて) ○コクトヒス(焼魚) ○フラトハルコ(猪の股丸焼) ○ハクトヒス(油揚げ魚) ○カルマナーティ(猪の薄切り塩胡椒摺込み焼) ○コテレット(鶏紅毛紙包み焼) ○カステイラプロト(紙焼カステイラ) などとある。玄沢は長崎の通詞たちのように、出島から

食でもないというちゃんぼんの居場所を表している。呼び名が、唐鉦「*2」の音「チャン」と鼓の音「ポン」を合わせた日中の合作であるとか、調理法の混ぜると炒めるを合わせたという中国語「攪烹」から来ているなどと、諸説があつてまともらない。

実は、ちゃんぼんは明治期に料理店「四海樓」の主人・陳平順がおなかをすかせた中国人留学生のために考案したもので、豚骨や鶏ガラのスープに、麺はかん水でなく上海から伝わった唐灰汁を加えて練ってある。中華料理の技術と長崎の食材と味付けが合わさった長崎でだからこそ作られた、じつにハイブリッドな料理だといえる。

たちまちのうちに長崎を代表する味になったのが、近年は海外、特に長崎を訪れるアジアからの観光客にも大人気のようだ。これこそ食文化の結びつきが生んだ、新たな異文化同士の出会いといってもいい。

江戸時代、全国に外国の食の情報発信した長崎が、今ではインバウンドのお客様の味覚を魅了している。長崎は食の十字路として和華蘭葡の粹にとどまらず、次の世代に足を踏み入れているのである。そこからは、また新しい食文化が誕生する可能性もおおいにある。国境を越えた人材往来がいよいよ日常的になるなか、異文化との結びつきの先駆けである当地の食文化が、その指標となる場面はますます多くなっていくはずだ。

注 *1 甲比丹。江戸時代、長崎のオランダ商館長をこう呼んだ。もとは外国船の船長を意味し、英語の captain に通じる。
*2 皿のような形の金属製の打楽器で、棒で内側をたたいて音を出す。日本でも、よく似た楽器が郷土音楽やお囃子に多く用いられている。

デジタル化の波に直面するエネルギー業界

友澤孝規
Tomozawa Takao

デジタル系企業によるエネルギー業界への進出が話題を呼んでいるが、今後ますますその動きは加速することが予想される。エネルギーとデジタルというまったく異なる分野を、どのようにつなぎ、どのように進化させていけばよいのだろうか。その鍵となりうる現状の動きと、有効な取り組みや仕組みづくりについて考察する。

ともざわ・たかのり
経済産業研究所コンサルティングフェロー。1984年、愛媛県生まれ。2007年東京大学工学部卒業後、同大学院の技術経営戦略学専攻にて博士号を取得。経済産業省に入省後、アベノミクスの実行などの業務経験を積み、18年にはエネルギー基本計画見直し作業の中核を担ったことで経済産業大臣より優秀職員表彰を受ける。その後、スタンフォード大学への留学を経て、現在は電力ネットワーク政策などを担当。

はじめに ——デジタル系企業の3つの動き

GAFA（グーグル・アマゾン・フェイスブック・アップル）に代表されるデジタル系の企業が異業種分野への進出を加速するなか、エネルギー業界においてもその動きの活発化が見られる。大量の電力を消費するデータセンターの建設に向けて再生可能エネルギーの調達が進むといった①「エネルギー業界における需要家」としての動きはもちろん、デジタル技術を駆使したエネルギー使用の効率化やエネルギー設備メンテナンスの高度化を支える②「エネルギー業界におけるサポーター」としての動きや、再生可能エネルギーやEV（電気自動車）・蓄電池、コージェネレーションなどの分散型リソースをデジタル技術で統合的に制御して供給するといった③「エネルギー業界における

供給者」としての動きも見られる。これらの動きを踏まえつつ、デジタル化の波を活かすためには、データの活用が鍵となる。

国もその動きに呼応した環境整備に乗り出しており、マクロレベルではデジタル化による更なるレジリエンス強化やCO₂削減、エネルギーコストの抑制などに力を入れつつあるが、産業レベルでは活発化する競争のなかで「異なるものをつなぐ」ことによるエネルギーにとどまらない、新しいサービスの創出が期待されている。

①「エネルギー業界における需要家」としての動き

「エネルギー業界における需要家」としてのGAFAをはじめとしたデジタル系の企業は、電力を大量に消費するデータセンターへの大規模な投資をすることにより、エネルギーの

にしようという「RE100」の取り組みにも、多くのデジタル系企業が参加してきている。

②「エネルギー業界におけるサポーター」としての動き

デジタル系の企業は「エネルギー業界におけるサポーター」として、既存のエネルギー企業の効率化などの後押しもしている。たとえば、日本でもデジタル系の企業であるDeNAが、石炭火力発電所の燃料運用最適化を行うAIソリューションを電力会社と共同開発している。石炭火力発電所では、輸送船から受け入れた石炭をサイロでいったん貯蔵した後にボイラで燃焼しているが、石炭の種類によって混載や混焼ができないなどの

③「エネルギー業界における供給者」としての動き

「エネルギー業界における供給者」としてのデジタル系企業の動きの背景としては、太陽光発電などの再エネ発電の普及により、これまでの大規模発電所のような一極集中型ではない小規模な発電所が増加し、「エネルギーの分散化」が進んでいることがあげられる。

日本では、2019年以降、「再生可能エネルギーの固定価格買取制度（FIT制度）」の対象期間を終えた「FIT」太陽光発電が大量にあらわれているが、投資回収が済んだ安価な電源として活用できるようになるなど、分散化の動きは今後もいっそう進展することが予想される。

今までは比較的制御が容易な一極集中型の発電所による電力システムに支えられてきたが、大量の小規模な発電所を効果的にコントロールし電力システムを支えていくためには、よりいっそう高度な技術が求められる。その

ため、電力需給の予測をAIやIoTなどを使うことでより高度化するためのデジタル技術や、分散化した電源を集約（アグリゲート）したり最適に制御したりするためのデジタル技術が注目されている。

分散化した電源を効率的に使う方法としては、「ディマンドレスポンス（DR）」や、「バルチャルパワープラント（VPP）」という方法がある。DRとは、需要側（ディマンド）の機器を遠隔でコントロールし、電力の消費パターンを変化させる方法で、日本では2017年度より、大口の需要家を対象とするものが実際に活用されている。

またVPPは、電力系統上に散らばる再エネ発電機器や蓄電池などのエネルギーリソースを、IoT技術を使って遠隔で制御することで、エネルギーリソース側から電力系統に電力を流したり（逆潮流）、需要を削減するなどのDRを行ったりすることで、大きなひとつの発電所のように利用する仕組みである。天候によって再生可能エネルギーの出力（発電量）が変動した場合のバックアップとなる、需給バランスの新たな「調整力」としての活用も期待されている。

VPPでは、電力の供給者と需要家の間に立って全体のバランスをコントロールする「アグリゲーター」と呼ばれる事業者がキープレイヤーとなり、日本でも、国による実証事業が行われているほか、従来の電気事業者だけでなく、コンビニエンスストアやビルオートメーション事業などのさまざまな産業の事業者が参入している。また、石油会社のシェルはVPP事業者である「Limejump」を買収し



GAFAが拠点を構えるカリフォルニア州にあるモハーベ砂漠の風力発電地帯。無数の風車が立ち並び、大量の電力を消費するデジタル系の企業を支えている。

たが、既存のエネルギー企業もこの動きに乗るべく活動を活性化させている。

デジタル化の波に乗るためのデータ活用と「異なるもの（データ）をつなぐ」取り組み

デジタル化の流れをどこまで活かすことができるかは、膨大化するデータを如何に使いこなすか次第とも言える。

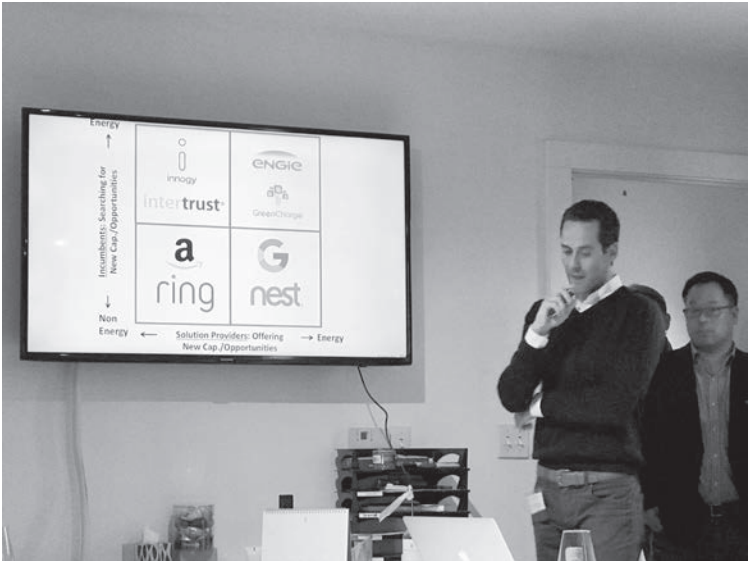
たとえば、電気事業を営む上で得られる情報（電力データ）には、発電分野であれば燃料の実績データや出力（発電）の実績データなど、送配電分野であれば送電線の潮流（電気の流れ）データなど、小売分野であれば顧客情報など、さまざまなデータが存在する。なかでも送電・配電分野における電力データのうち、電気の使用量や使用時間などの電力使用状況に関するデータは、デジタル技術を使って遠隔で検針ができる「スマートメーター」の登場により、これまで以上に正確なデータを容易に集められるようになったことから、利活用が期待されている。これだけさまざまな電気機器が日常生活のなかで使われるようになった現代において、電力の使用状況に関するデータは、世帯活動を把握することを可能にし、災害時においては避難状況などの可視化につながる可能性もある。

この電力データにさまざまな異なるデータを組み合わせることで、より多様なサービスを、顧客のニーズに合わせて提供することも可能になる。電力産業にとどまらず、さまざまな産業で、電力データを活用した新たなサービスが生まれることが期待される。

たとえば、人手不足が深刻な運輸業においては、特に負担となっているのは届け先が不在の場合な

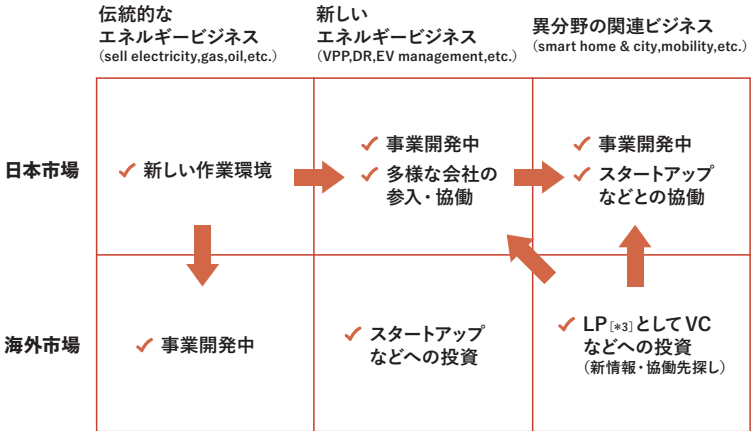
とで新たな価値を生み出すためのエコシステムの構築に力を入れている。

シリコンバレーなどでは特に欧州企業の動きが活発であるが、たとえばドイツの電力会社であるイノジューは、データ・ドリブン「*2」のエネルギー事業を志向して、スタートアップへの投資や育成に積極的である。背景には、GAF Aなどに對する危機感があり、アマゾンのAmazon Primeのサービスのひとつに電力供給が加えられた場合、顧客を維持し続けることができるかという視点があろうだ。イノジューは、イノベーションを加速させるエコシステムを構築するため、シリコンバレーに「Innogy Innovation Hub」という拠点を



シリコンバレーの中心とも言えるスタンフォード大学で教鞭を執るComello氏によるプレゼン。グーグルやアマゾンの商品を、エネルギー業界におけるデジタル化の事例として紹介している。

図：エネルギー産業のビジネス展開を整理するフレームワーク



どに発生する再配達だが、スマートメーターから収集したリアルタイムの電力使用量データと、過去の配達実績、渋滞や天候の情報を組み合わせ、在宅状況や交通事情を踏まえた最適な配送ルートを設定することで、よりスムーズな配達作業を実現し、再配達の負担を減らすアイデアが検討されている。配達業務の効率化により、配達にともなうCO₂の削減といった効果も期待される。またほかにも、スマートメーターのデータをもとに、規則正しい生活をしていると考えられる人を推計し保険料を安くする、保険の新メニューの開発をしたり、スマートメーターのデータが普段とちがう使用パターンになった時に迅速に対応する、自治体などによる見守りサービスを提供したりといったアイデアも考えられる。

エネルギー業界のデジタル化に呼応した国による仕組みの整備

期待される電力データの活用だが、実際にはまだまだ多くの課題が残っている。

ひとつは個人情報保護との関係である。電力使用量などの電力データは個人情報にあたりうるため、利活用にあたっては、個人情報保護を大前提としながら、具体的な活用のニーズや効果などを考えて必要なルールを整備し、提供の対象となるデータを整理する必要がある。スマートメーターから提供されるデータには、ひとつのメーター単位のデータで個人の識別が可能な「個人情報」、個人情報から氏名などを削除して特定の個人を識別できないよう加工された「匿名加工情報」、複数人の情報を分類し集計した「統計情報」があるが、この「個人情報」を活用すれば、災害時に各住宅の電力使用状況がわかりその被害を正確に把

握できるなどさまざまな価値を生み出すことが可能となるため、「個人情報」を活用する上でどのような仕組みを整えるかを考えていくことが大切となる。

このような背景により、国では「情報銀行」の仕組みを基本としながら制度を整備することが検討されている。「情報銀行」とは、認定を受けた組織が個人から委任を受け、本人の同意の範囲内で第三者へ情報提供を行うなど、情報を適切に管理する仕組みである。消費者保護のため、情報の提供先について第三者が審議・助言を行うことなどが定められており、電力データ活用にあたっても、中立性の高い組織による監視・監督の必要性が議論されている。このような仕組みが整えば、さまざまな異なるデータを組み合わせることで、より多様なサービスを、顧客のニーズに合わせて提供することが更に可能となると考えられる。

またほかに、デジタル技術を活かした取り組みを後押しする仕組みとしては、配電事業ライセンスの整備があげられる。配電事業は現在、一般送配電事業者10社による独占状態だが、高度なデジタル技術を持つような新規参入者によるAIやIoTを活用した新たな系統運用を通じたコスト効率化や、災害時などに系統を独立化することによるレジリエンス強化を期待して、新たなライセンスを与える仕組みが議論されている。異なるものが新たに参入する余地が生まれることは、イノベーションが生まれる土壌になると考えられる。

日本のエネルギー業界の「異なるものをつなぐ」取り組みへの期待

世界中のエネルギー企業が現在、デジタル化の波を乗り切るために、「異なるものをつなぐ」こ

Scrump Ventures、大阪ガスのWILといったシリコンバレー現地のVC（ベンチャーキャピタル）への出資などである。

日本のエネルギー企業は、図（エネルギー産業のビジネス展開を整理しフレームワーク化したもの）に示したように、左上の日本市場で行ってきた伝統的なエネルギービジネスの厳しい状況から、それを海外市場への展開につなげると同時に、日本市場における新しいエネルギービジネスの開発や、異分野の関連ビジネスに乗り出してきている。日本の市場・競争環境や企業文化などを理解しつつシリコンバレーの優良なスタートアップへのアクセスを提供する現地プレーヤーとの協業は、各社がこのようなヒットを持続的に生み出すエコシステム構築、オープンイノベーション成功の鍵となる。

変化のスピードが速い昨今のデジタル化の波に上手く乗るためには、日本のエネルギー業界にとっても、シリコンバレーをはじめとした先端的な地域における良質な関係性、エコシステムを構築することが求められている。

注

*1 PDAは、Power Purchase Agreementの略。発電事業者が必要者などの間で締結する、電力販売契約のことを指す。更にそこから発展し、需要者（顧客）の敷地や屋根上に、事業者が自らの持つ太陽光発電システムを設置し、そこで発電した電力を顧客に販売するモデルを、日本では「PPAモデル」と呼ぶ。

*2 データ・ドリブン（data driven）とは、得られたデータを総合的に分析し、未来予測・意思決定・企画立案などに役立てることを指す。特に、ビッグデータを対象とし、各種データを可視化して課題解決に結びつけることを目的とし、使用されることが多い。

*3 米国などで認められている企業形態のひとつであるリミテッド・パートナーシップの略称。無限責任を負う最低1名のゼネラル・パートナーと、有限責任をもつリミテッド・パートナーによって組織されている。

弱い紐帯の強み

——これからつながりづくりを考える

村山洋史
Murayama Hiroshi

社会との紐帯（つながり）は、高齢期においてこそ重要な意味を持ち、その有無が、心身の健康にまで影響を及ぼす——。

「高齢社会2030を考える会」第3回でも解説された
東京大学高齢社会総合研究機構の村山洋史特任講師の提言が、
高齢社会を変える可能性を示唆する。

むらやま・ひろし
東京大学高齢社会総合研究機構特任講師。1979年、三重県生まれ。専門は、公衆衛生学、老年学。2015年に公益財団法人長寿科学振興財団長寿科学賞を受賞。著書に『つながり』と健康格差——なぜ夫と別れても妻は変わらず健康なのか（ポプラ新書）がある。

つながりが私たちの健康を左右する

私たちの健康は、運動や食事など、日常の行動に大きく左右される。しかし、実はそれらの行動は、人や社会とのつながりを通し、知らず知らずのうちに周囲の人々から影響を受けている。2010年に発表されたメタ分析「*1」（同じテーマを扱っている研究を集め、それらの結果を統合して結論を出す方法）では、禁煙、適度な飲酒、運動などのいわゆる「健康的な生活習慣」よりも、社会とのつながりが多いことの方が死亡リスクが低いと報告されている（図1）。

人間は「社会的生き物」といわれるように、私たちは多かれ少なかれ誰かと何かしらのつながりを持って生きている。最近の健康づくりの現場では、そういったつながりをうまく活かしたり補ったりしながら、結果的に健康になれるような仕組みづくりが進められている。

ところが、現代の日本人は決してつながりに恵まれているわけではない。OECD（経済協力開発機構）の調査「*2」では、対象となった21加盟国中、日本は2番目に社会的孤立者の割合が高かった。日本人の近所付き合いの程度の変遷をみてみると、今から50年ほど前は多くの人が密な付き合いをしていた。しかし、近年ではそういった人はごく少数にとどまっている。かつては豊かだった日本人のつながりは、時代とともに徐々に希薄になっていると理解することができる。

では、つながりが少ない日本人はつながりに対してどういう意識を持っているのだろうか。ある調査「*3」では、「多くの人から理解されていなくても、気の合った仲間さえわかってくれればよい」という質問に「そう思う」と回答した者の割合は、10代、20代の若年層で約8割、50代、60代でも6〜7割にのぼった。この割合は、性別や年代を問わず、2000年以降増加傾向にある。

これは人間関係の内輪志向を表していると考え

られる。この内輪志向が日本人の社会的なつながりの少なさにつながっている可能性もある。日本人は、絆やつながりを大切にしたいという意識は強いのかもしれないが、「声を掛けると迷惑じゃないだろうか」「事情はわからないけど、そっと



「高齢社会2030を考える会」第3回（2019年8月20日開催）で講演する著者

しておいてあげた方がよさそう」など、相手のことを推し量るあまり、いざつながりをつくるとなると遠慮しがちな傾向がある。日本人の良さではあるものの、それが社会的孤立を増やしたり、サポートを得る機会を少なくしてしまっているのは残念でもある。

SNSでのつながり

現代のつながりを語る上で、いまやSNSの存在を外すことはできない。SNSによる「バーチャルつながり」はどういった影響を持つのだろうか。

例えば、フェイスブック（以下、FB）。イギリスの、ソーシャルメディアをよく利用する

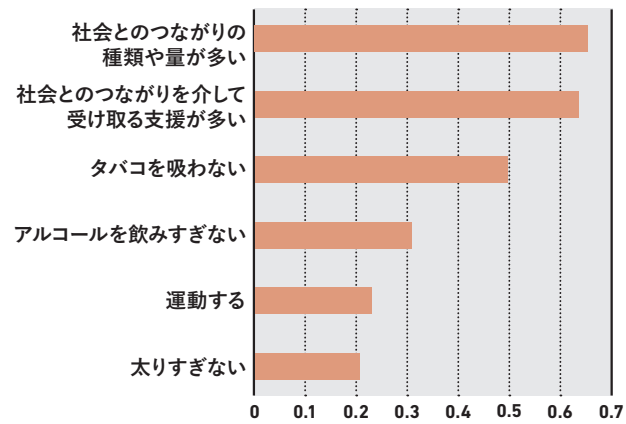
2000人を対象にした調査「*4」では、FB上の友達の平均は150人ほどで、そのうち親しい間柄の友人は13・6人、すぐく落ち込んだ時にアドバイスや同情をしてくれそうな人は4・6人だった。しかし面白いことに、FB上の友達が100人以上のとても多い人であっても、親しい友人やアドバイス・同情をしてくれる人の数は、全体の平均とあまり変わりがなかったのである。

相手を十分に理解し、関係をメンテナンスするには、ある程度の時間とコストが必要である。そのため、たとえFB友達が多くても、全ての関係をメンテナンスすることができず、結果として実際に機能する相手は一部に限られるというわけである。

FBでの友達数が多い人ほど死亡率が低いとい

弱いつながりが大事

■図1：ライフスタイル別での長寿への影響の比較



数字は、死亡率の低さに与える影響の大きさを表す。ゼロの場合、影響がないことを意味する。
出典／Holt-Lunstad J, Smith TB, Layton JB. Social relationships and mortality risk: A meta-analytic review. PLoS Medicine 2010; 7(7) : e1000316. (論文より著者がグラフを作成)

■図2：社会的コンボイモデル

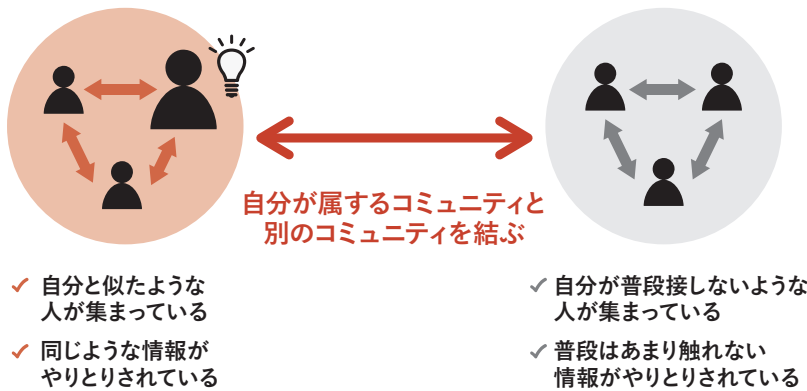


「本人」が様々な人と関わりながら人生を乗り切っていく様をコンボイ（母艦と護衛艦からなる護送船団）になぞらえている。

ここまで、つながりと健康の関係について述べてきたが、「結局、どういうつながりを持てばいいのか？」という疑問を持つ人は多いだろう。この質問への回答は簡単ではない。というのも、つながりが及ぼす健康への影響は各人の状況や特性によって大きく異なり、そのため、飲酒量や運動量のように、「このくらいならOK」と結論付けにくいのである。しかし、何もいえることがないわけではない。少なくとも、多様なつながりの選択肢を持ち、その時の自分にとって居心地のよい関係を大切にすることが重要なことは間違いない。加えて、「弱いつながり」を持つことが大事である。

私たちが持つつながりの構造を見える化する方法の一つに、「社会的コンボイモデル」というものがある（図2）。中心に近いほど身近であったり考え方が似ていたり、長期にわたり安定した関係にある存在が置かれる。こういった人との関係は、「強いつながり」と捉えることができ、この

■図3：「弱い紐帯の強み」理論のイメージ



つながりを通して様々なサポートが授受されるといわれている。一方、中心から遠い人、例えば形式的な関係性の人やかかりつけ医といった専門家などとのつながりは、中心に近い存在の人とのつながりに比べると安定しておらず、役割や状況に依存しやすい。これらの人とのつながりは、強いつながりと対比させて「弱いつながり」と表現できる。

アメリカの社会学者のマーク・グラノベッター

しかし、移住までは踏み切れない人が多い現実を踏まえると、何かの形で地域に関心や関わりを持つてくれる人を集めるという試みは、地域活性化のための大事な選択肢と捉えることができる。前述の白川郷の取り組みは関係人口拡大の取り組みといえる。また、つながりの文脈で考えると、関係人口はまさに地域における弱いつながりを増やす取り組みといえるかもしれない。

関係人口を増やす取り組みとともに重要になるのが、もともとからその地域に住んでいる地元住民との調和だろう。同じ地域で生活や活動をしているのであれば、大なり小なり交わりは起こるものである。その時に、相手のことを受け入れ、理解し合っているかどうかは、交わりの質に影響してくる。この互いの受け入れや理解を促すためにはどうしたらよいのだろうか。

地元住民は、多くの場合そこに家や土地があるからその地域に住んでいる（例えば、その地域に生まれたから、あるいは嫁いだから、そこで生活が続いている）。一方の関係人口は、その地域に関心やゆかりがあり、関わることへの明確な動機を持っている。同じ地域に関与しているにしてもその動機が全く異なるこの二者が互いに受け入れや理解をするためには、何らかの「理由」が必要になる。逆をいえば、「理由」があれば、人はつながるきっかけを持つことができる。弱いつながりは役割や状況に依存すると述べたが、その役割や状況を作り出せば弱いつながりは構築できるのである。

再び白川郷の例に戻る。世界遺産である白川郷は、テレビや雑誌など世界中の様々な媒体で紹介され、国内外問わず毎年たくさんの観光客が訪れる。その中には、「茅葺きの作業をやってみたい」「白川郷の歴史を体感してみたい」といった思い

が提唱した「弱い紐帯の強み」(The strength of weak ties) 理論[*9]は、この弱いつながりの重要性を示すものである。この理論によると、「配偶者や親友などの強いつながりではなく、普段関わりが少なく関係性が薄い人との弱いつながりの方が、有益で新規性の高い情報をもたらす」という。例えば、家族や親友などの近しい存在の人は、置かれた環境が似ており、同じような生活スタイル、価値観、思想を持つことが多い。そうすると、そのつながりの中(コミュニティ)でやりとりされる情報は、入手経路も内容も似たようなものになることが多く、実は自分が持っている情報と代わり映えないということが往々に起こり得る。対して、つながりが弱い人、例えば職場でちょっとした会話をするだけの人や昔の友達などは、自分とは異なる環境に身を置いているため、自分が普段あまり触れることがない情報を持ち、それを与えてくれる可能性が高い(図3)。

健康との関連においては、例えば高齢者を対象にした研究[*7]では、自分とは異なる背景を持つ人との付き合い、つまり弱いつながりが多いほど、抑うつになりにくく、認知機能低下が起こりにくいと報告されている。自分と背景が違う人と関わることで、日常生活にいつもと違う風が通り、メンタルヘルスが改善し、そういった関わりの中で脳が刺激され、認知機能低下が抑制されたと考えられる。

つながりをつくる、強めるというと、往々にして近い人どうしで固めがちになるが、逆に近くない人との弱いつながりも決して無視できない、むしろ大事だということである。人間関係が内輪傾向の日本人には、この弱いつながりがもっと必要であるように感じる。

(ニーズ)を持つ人が一定数いるはずである。一方の地元住民には、「茅葺き作業を手伝ってくれるマンパワーが必要」というニーズが存在している。両者のニーズの合致が関わる理由になり、うまく交わりができていく。

では、高島市のような、顕著な特徴があるわけでもない「普通の」地域ではどうすればよいのか。一つには、その地域の文化や歴史を通じた共同作業の機会が重要と考える。例えば、祭りである。

欧米諸国の祭りとは異なり、東アジア諸国の祭りは、その土地土地に根差すものが多いという特徴を持つ。古来から人々は祭りを通してその地域の文化や歴史を知り、地域に対する帰属意識を養い、地域全体の結束力を維持してきた。例えば、有名な大阪・岸和田のだんじり祭では、地域の老若男女が分け隔てなく祭りという目的に対して没頭し、祭りを通してその土地の文化や伝統、しきたりなどの世代間継承が行われてきたという。

祭りといっても、長い歴史があるものからそうでないもの、大規模なものから小規模なものまで色々ある。だが、重要なのは、共同で作業するという過程であり、祭りの特性自体ではない。どんな祭りであっても、地域住民と関係人口が交わる「理由」になればよいのである。

関係人口を増やすことの先に、地元住民と関係人口との調和がうまくなされてくれば、つながりづくり、あるいは地域活性化のヒントやあるべき姿が見えてくる気がする。

まとめ

本稿の前半では、つながりと健康に関する知見を概観し、弱いつながりの重要性について述べた。

これからのつながりづくり ——「高島縁人」を例にして

先に述べたように、日本人が持つつながりは、時代とともに徐々に希薄になっている。しかし、人々のつながりが緊密だった過去にタイムスリップして、かつてのつながりを取り戻すことはできない。今の時代に合わせたつながりの仕組みづくりが必要になる。

例えば、世界遺産として有名な白川郷では、高齢化による労働力不足や過疎化による人口減少によって、合掌造りの茅葺き作業を担う人材が不足しているという。そういった事態に対処するため、地域の若者に重労働を担ってもらえるような管理会社を設立したり、茅葺き作業に関心を持つ外の人を巻き込むような取り組みを積極的に行っているそうである。世界遺産の白川郷でさえ、積極的に時代に合わせた仕組みづくりに取り組んでいるわけであり、他の地域でもやってやれないことはないはずである。

2019年12月、ご縁をいただき、滋賀県高島市(人口約4.8万人)の視察をさせていただいた。高島市は、地域活性化に向けて「高島縁人」を増やす取り組みを推進している(詳しくは『CEL』121号51頁参照)。高島縁人とは、観光者と定住者の中間の層であり、高島市に何らかの縁やゆかりを持つ人たちの総称である。

この中間の層は、一般には関係人口(移住した「定住人口」でもなく、観光に來た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと…総務省「関係人口」ポータルサイトより)と呼ばれる。地方都市は人口減少や高齢化の歯止めがきかない中、移住してくれる人を募集していることが多い。

関係性に、0か100かの極端を求めるのではなく、その中間くらいのお互いに向かい合うような距離感も大事ということである。弱いつながりは、その時々役割や状況に依存し、ある意味で不安定で緊張感のある関係性ともいえる。だからこそ、弱いつながりを築く際には、細心の配慮が必要である。後半で紹介した高島縁人の取り組みは、まさに地域での弱いつながりを増やす試みであるが、成り行きを自然に任せるのではなく、綿密な仕掛けが必要だと考える。

「地元住民と関係人口とがどうやって融合しているのか」「その融合が住む人の健康や幸福感、生活の質(OL: Quality of Life)にどういう影響を及ぼすのか」など、高島縁人をめぐって起こり得る現象への興味は尽きない。また、いい意味で「普通の」地域である高島市の取り組みは、人口減少や高齢化に直面し頭を悩ませている他の地域の問題解決にも直結していくであろう。高島縁人の今後に注目したい。

注

*1 Holt-Lunsted J, Smith TB, Layton JB. Social relationships and mortality risk: A meta-analytic review. PLoS Medicine 2010; 7(7): e1000316.
*2 OECD. Society at a Glance. 2005.
*3 野村総合研究所「生活者1万人アンケート調査(2000～2018)」
*4 Dunbar RIM. Do online social media cut through the constraints that limit the size of offline social networks? Royal Society Open Science 2016; 3: 150292.
*5 Hobbs WR, Burke M, Christakis NA, et al. Online social integration is associated with reduced mortality risk. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America 2016; 113(46): 12980-12984.
*6 Granovetter MS. The strength of weak ties. American Journal of Sociology 1973; 78(6): 1360-1380.
*7 Murayama H, Nishi M, Matsuo E, et al. Do bonding and bridging social capital affect self-rated health, depressive mood and cognitive decline in older Japanese? A prospective cohort study. Social Science & Medicine 2013; 98: 247-252.

語りベシアター シンガポール公演報告

― 文楽を通して、大阪・上方の歴史と文化を紹介 ―

まちの歴史や文化を物語として編集し、音楽と映像を交えた語りで伝える「語りベシアター」初の海外公演。活動を始めてから25年を経た2019年9月、2日間にわたる初の海外公演をシンガポールで実施した。現地の観客から大きな反響を得た公演の様子を紹介する。

Rumi Sakurai 取材
米田菜衣子 構成

「語りベシアター」初の海外公演

日本文化に関する情報発信の拠点として2009年にシンガポールに設立された在シンガポール日本国大使館ジャパン・クリエイティブ・センター（以下、JCC）。日本を紹介する機関として、伝統文化や芸術をはじめ、食、ライフスタイル、建築、科学技術、アニメ・漫画・ファッションなどのポップカルチャーまで、さまざまな日本の文化を紹介するイベントを開催している。そのJCCが2019年の設立10周年を記念して10月に開催したのが、人形浄瑠璃・文楽の公演だ。17



語りベシアター シンガポール公演 「文楽の魅力とその舞台」

日時	2019年9月25日 19:00 ~ 20:30 9月26日 18:30 ~ 20:00
場所	日本人会オーデトリウム (25日) JCC内小ホール (26日)
登壇者	栗本智代 (CEL)
共演者	宮川真由美 (ピアニスト) 未波 (篠笛奏者)
主催	Japan Creative Centre (JCC)

JCC設立10周年を記念した文楽公演のプレイベントとして開催。「文楽の魅力とその舞台」と題し、文楽を育んだ大阪・上方の魅力やエピソードとともに、文楽の代表的な作品『曾根崎心中』の内容を、「語りベシアター」の形式を交えて紹介した。

世紀の大坂で生まれた文楽は、ユネスコの無形文化遺産に登録される日本を代表する伝統芸能である。しかし、シンガポールで文楽の公演を行うのは初めてのことで、そこで、文楽に馴染みのないシンガポールの方に

より味わい深く鑑賞してもらうため、記念公演に先立ち、文楽の見方や魅力、文楽が生まれた時代背景を、「語りベシアター」の公演手法を活用して紹介することになった。「語りベシアター」にとっても、海

外公演は初の試み。今回は、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)の栗本智代研究員、ピアニストの宮川真由美さん、現地在住の能楽バフォーマーで篠笛奏者の未波さんの3人で公演に臨んだ。

文楽の魅力をどのように伝えるか？

シンガポールは親日の国で、街中のいたるところで、日本食や日本のブランドを目にする。多くのシンガポール人が何度も日本へ旅行し、テレビでは日本を訪れる旅行番組が放送され、タクシーに乗れば日本語を話すドライバーに出会う……という具合に、日本文化が日常に溶け込んでいる国である。

シンガポールでは今までに、歌舞伎、能楽、狂言などの日本の伝統芸能が上演されてきた。とはいえ、日本人であっても難しいイメージのある文楽をどのようにシンガポール人

に伝えるのか？それが、今回の大きな課題であった。「シンガポールのお客さまがどの程度、日本や大阪の歴史、伝統芸能に興味があるのか全く予想がつきませんでした」と、栗本研究員も当初の不安を振り返る。地元関西での公演でも、わかりやすく伝えるための創意工夫に時間をかけているそうだ。

そこで今回の公演では、ほとんどの観客が日本や大阪に関して、予備知識も土地勘もないであろうという前提のもと、準備を進めた。

公演の内容は、これまでの活動で積み上げてきた素材を、今回のシンガポール公演用にアレンジ。試行錯誤を重ねて日本語原稿から作成し、英語翻訳、公演用のパワーポイント

作成などを含め、約5カ月にも及ぶ準備期間を要した。

第1部 スピーチ 「文楽の魅力とその舞台」

公演初日は、日本人会にある200人収容のコンサートホール、2日目は演者と観客の距離が近い、JCC内の小ホールにて行われた。両日ともに、会場はほぼ満席。来場者はシンガポール人、シンガポール在住の欧米人・日本人という国際色豊かな顔ぶれとなった。

公演は英語スピーチと「語りベシアター」の2部構成となっており、第1部では「The Charm and Background of Bunraku (文楽の魅力とその舞台)」

と題し、文楽とは何か、そのルーツや時代背景、テーマ、ストーリーについて、栗本研究員による英語でのスピーチと映像でプレゼンテーションが行われた。

前半は、文楽の起源や特徴と、文楽の土壌となった大坂のまちについての解説から始まった。文楽が広まり始めた江戸期の大坂は、日本全体の富の7割が集結するほど、商業的に栄えたまちだった。大坂中が運河で結ばれ、「水の都」とも呼ばれていた。あらゆる物資が大坂に運び込まれ、さまざまなものが大坂から広がり発展していったそう。このような点は現在のシンガポールに似ている、と栗本研究員は指摘した。また、異なる才能を持つプロたちが協



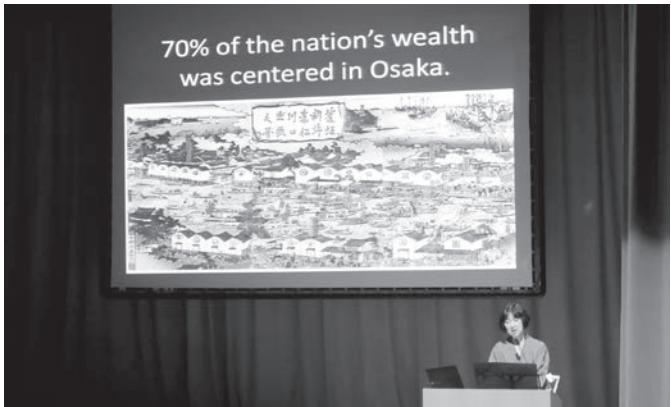
「語りベシアター」初の海外公演が行われたシンガポール。



英語と大阪弁でプレゼンテーションを行う栗本智代研究員。



力強い音色を奏でた篠笛奏者の未波さんと音楽監督・ピアニストの宮川真由美さん。



上／1日目の公演が行われた日本人会オーデトリウム。第1部「文楽の魅力とその舞台」では、映像を交えながら、文楽のルーツや時代背景を英語で解説した。
中／「語りベシアター」形式で上演した、第2部「曾根崎心中ものがたり」。
下／200人収容のホールが満席になるほど、多くの観客が詰めかけた。

力することで新たな価値を創出する、という風土が大坂にはあり、文楽の三位一体（太夫、三味線弾き、人形遣い）はその象徴ともいえると続けた。後半では、近松門左衛門が文楽の新境地を開拓し、一大ブームを巻き起こしたことにふれ、最後に、「語りベシアター」の活動を地域へ広げる試みについて紹介がなされた。

プレゼンテーションのなかで特に興味深かったのは、近松門左衛門とシェイクスピアの比較だ。栗本研究員は近松門左衛門を「日本のシェイクスピア」と紹介した。シンガポールはかつてイギリス領だったため、

イギリスの劇作家であるシェイクスピアはシンガポール人にとっても馴染みが深い。シェイクスピアも近松も、実社会での道徳や倫理観を作品に取り入れたという部分で類似点がある。今回の公演で上演した近松の『曾根崎心中』が、同じく悲恋を描いたシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』に似ている、と感じた観客もいたようだ。

第2部 語りベシアター 「曾根崎心中ものがたり」

第2部は、語りと生演奏、映像に

わたった後はまるで映画や演劇を鑑賞したかのような満足感があり、改めて「語り」の凄さを実感した。

最後は、シンガポールの建国記念日の式典などでも歌われる曲「Home」の演奏で、公演が終了。両日とも、拍手喝采で幕を閉じた。

シンガポール公演 観客の声を通じて

公演終了後は、感想や質疑応答の時間。観客からは「大変わかりやすく、素晴らしかった」「感動した」という感想が多かった。また、今回の公演の内容はどのように調べ、準備・制作されたのかと強く興味を示

す質問もあった。「心中」や、現代社会の「自殺問題」にまで言及する観客もいた。

ピアニストの宮川さんが、劇中の曲はシンガポールを代表する2曲以外、全て即興の演奏だったと明かしたところ、観客から驚きの歓声と拍手が湧き起こった。篠笛を演奏した未波さんによる楽器の紹介もあった。本公演では、強い音の特徴とし、能で使われる「能管」、ソフトな音色で、祭りなどで使われる「篠笛」の2種類、合計4本の笛をシーンに合わせて使い分けていたそうだ。

JCCの杉田明子所長は「お客さまの拍手がこれまでの催しと比べても格段に大きかった」と成功を喜

んだ。

公演の前後、観客に本公演に興味を持ったきっかけや公演の感想を伺った。

日本の大手広告会社で勤務経験がある、シンガポール人のパトリックさんは、『曾根崎心中』は悲しい恋の話だね。即興の音楽がエネルギーで、ストーリーにピッタリ合っていたよ！」と興奮気味に話した。

同じくシンガポール人のアンジーさんは、以前日本旅行で文楽を観て、生きているかのように人形を動かす人形遣いに感動したそうだ。「3人でひとつの人形を動かすのがとても興味深かった。たとえ話がわからなくても、人形の動きや太夫の声の表現、三味線の音色で、完全に物語に入り込んでしまったわ」と語った。

シンガポール在住オーストラリア人のメレニーさんは、舞踊や劇をはじめアジアの文化に興味があるそうだ。歌舞伎や能と異なり、人形劇の文楽で、どのようにストーリーが表現されるのかが気になったという。「日本の伝統芸能は他のアジア圏とも違い、とてもユニーク。日本で何度か歌舞伎や能は観劇したけど、文楽は今回が初めて」と翌月の文楽公演も楽しみにしていた。

会場で痛感したのは、「シンガポールの観客たちは、もしかしたら一般の日本人よりも日本の伝統文化

された。徳兵衛、お初、九平次……それぞれの役を演じ分ける語りに、観客も「曾根崎心中」の世界に引き込まれているようだった。

お初が徳兵衛を心中に誘う場面では、会場全体に緊張感がはしった。生きてはられないほどの苦しみや屈辱があり、そこに愛情が絡まることで心中は成立したという。お初と徳兵衛の場合は「男女の愛情」だけが原因ではなく、無実を証明できない徳兵衛の気の弱さや、遊女というお初の苦しい立場などが相まって「死」の決意へとつながったと解説された。

栗本研究員が作曲した歌が切なく響き、徳兵衛とお初が死に場所に向かうための「道行」のルートを当時の地図と現在の大阪の写真を照らし合わせながら映像で辿った。彼らが歩いた道のりは、今では繁華街や幹線道路になり、当時の川は埋め立てられ、面影すらないのだが、不思議とふたりが暗闇の中を歩く情景がイメージできた。

そしていよいよ、天神の森での心中シーン。語りは熱を増し、ピアノの伴奏のスピード感、篠笛の力強い音色は差し迫るものがあり、手に汗を握る迫真のクライマックスとなった。

本公演は、語りと音楽というシンブルな構成にもかかわらず、見終

に関心が強いのかもしれない……」ということ。文楽をはじめとした日本の伝統芸能は数百年に及ぶ長い歴史があり、他の国にはない唯一無二の文化だ。一方、シンガポールはまだ建国54年の若い国で、伝統文化といえど、中国やマレーシアから伝わったものが多く、独自の文化は本当に少ない。今回お話を伺ったアンジーさんが、「シンガポールは歴史が浅いから、長い歴史を持つ日本の伝統芸能に興味を持つんです」と語ってくれたことは、その表れかもしれない。

国際交流や相互理解を促進するためには、まずは自国の文化に誇りを持ち発信していくことが不可欠である。今回の公演では、スピーチや「語りベシアター」形式のパフォーマンスが、一見とつつきにくい地域の歴史や伝統文化を伝える手法として、海外でも非常に効果的であることを実証したといえよう。この経験やノウハウを生かして、今後も「語りベシアター」が国内の地域住民や来街者、訪日外国人をはじめ、国外の人びとに向けても活動を展開し、より広く深く日本の文化を伝えていくことを期待したい。



上演後はファシリテーターの方とともに活発な質疑応答が行われた。



2日目のJCC内小ホールにおける公演の様様。

私たちが考える万博

第3回 新「万博時代」をどうつくるか

「上町台地今昔フォーラム」で得られた成果

「私たちが考える万博」連載第1回では、これまで大阪で行われた博覧会の背景を考察し、万博が都市・産業戦略の一環として開催されてきたことを明らかにしました。

第2回は「大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの」として、史上No.1の万博「超万博」に向けた五つの考え方を提示し、一過性イベントに終わらせない、次世代に夢と力を与える万博を目指そうという願いも掲げました。

これらを踏まえ今後、「どう行動していくのか」を考えていくこととなりますが、今回は昨年CELが催した「上町台地今昔フォーラム」関連イベントの報告を交えてお話ししたいと思います。

フォーラムは「映像&トーク 1900年パリ万博から、大阪・関西万博後の百年へ上町台地を視点場に、都市と博覧会の世

大阪・関西万博開催まであと5年。新しい万博の時代を迎える私たちは、どのような未来を描くことができるだろうか。池永寛明大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)顧問と共に、大阪・関西万博をテーマにしたイベントなどを通じて、考察を重ねていく。今回は、大阪・関西万博をテーマにした「上町台地今昔フォーラム」に対する池永氏の所感と、イベントのレポートをお届けする。

構成 加藤しのぶ



池永寛明
いけなが ひろあき
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに関わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

紀をレビューする」と題し、都市と博覧会を再定義し、未来へとつなぐ試みの場となることを目的に開かれました。

プログラムは3幕構成。第1幕では、CELの弘本由香里研究員が映像資料を駆使し、1900年のパリ万博、さらにその後の1903年第5回内国勸業博覧会から1925年の大阪記念博覧会を経て1948年の復興大博覧会へと続いた、近代都市の形成と戦災と復興の歩みをレビューしました。

第2幕は、古川武志大阪市史料調査会調査員に登壇いただき、大阪で開かれた博覧会が持つ意味や、それと都市がどのように向き合ってきたかについてお話いただきました。続く第3幕では、私と古川氏、そして大阪大学大学院博士課程の学生である山蔦^{やまかた}栄太郎氏の3人で鼎談を行いました。山蔦氏は機械工学分野のバイオ応用研究を行う学生であると同時に、ナレッジキャピタルで立ち上げている「大阪・関西万博会議」ワイガヤサロン

出や、当時の空気感から想起されたと思われるポジティブな記述が多く見られました。対して後者は「平和」「環境」「高齢社会」など、社会的課題に対しての「なんとかしてほしい」という思いが感じられるネガティブな回答が多かったのです。

過去の万博に明るいイメージを抱きながら、新しい万博後の未来には悲観的ともいえるイメージしか抱いていない。私はこの落差に、大きな衝撃を受けました。「こんな日本で万

博をやってどうするのか?」という、リアルな声が聞こえてくるようです。この状況では、「万博で何をやるか?」「どんなパビリオンをつくるか?」を考えるとどころではありません。閉塞感が大きく、適合不全を起している現代日本の社会状況で万博に臨むにあたって、何から考えるべきでしょうか?

まずは、現在から大阪・関西万博、そして万博後という時間軸のなか、新「万博時代」のイメージをどうつくっていくか、それに対



フォーラムでの鼎談の様子。左から古川氏、山蔦氏、池永氏。



第五回内国勸業博覧会の全景図。左上に描かれる釣鐘は、博覧会に合わせてつくられた四天王寺の大釣鐘。

し」のメンバーでもあり、かつ70年万博を経験していない若い世代の代表としても登壇していただきました。当日は3人のトークだけでなく、会場からも興味深い意見が多く飛び出しました。

フォーラムの詳細は後半のレポートをご覧ください。先にも、当日会場で参加者対象に行ったアンケート結果についてお話ししたいと思います。この回答には、今回の万博を考えていくにあたり最も核となる意識の問題が明確に表れており、私にとってこのフォーラムで得られた最大の成果と感じています。

アンケートから見えた、70年万博観と未来観のギャップ

アンケートの項目は、「あなたにとっての万博とは?」と「2030年はどんな時代になってほしいですか?」の二つ。前者の回答で圧倒的に多かったのは70年万博についてで、実際に体験された方の楽しかったという思い

して知恵を結集させるべきでしょう。そこでポジティブなイメージを生み出すことができれば、万博への期待も自然と高まっていくはずです。70年万博のように、その時代を生きる人、ことに若い世代の人びとにとって、「万博があつてよかった」「この時代に生きてよかった」と思える新「万博時代」の機運をつくるのが、何よりも重要だと思っています。

新「万博時代」の機運をつくりだしていくために

少し話が飛びますが、私は、「大阪は巨大な縁側である——大阪縁側論」を考えています。外国人観光客が大阪の街を「心地よい」というのは、内でもなく外でもない「縁側」のような場所と感じるためではないかと思うからです。これまでさまざまなものを受け容れ、混じり合わせながら「日本的なるもの」を生み出してきた大阪、内と外をつなぎ新しいものに変換していくことに長けた大阪という「大阪縁側論」を背骨に、新「万博時代」前史5年の先駆けとなる本年、さらに議論を深めていきたいと思っています。

また「上町台地今昔タイムズ」では、博覧会時代の「モダン大阪に煌めいた若き才能たちの光跡」と題し、博覧会時代を駆けた人物をクロージアアップしています。これまで万博は都市戦略・産業戦略であるという話をしてきましたが、その中心にあるのは「人」であるということを忘れてはいけません。これに関連したイベントなども予定しています。



大阪の博覧会の歩みにまつわる弘本研究員の解説に、会場の参加者は興味深く聞きいった。

◆レポート 「上町台地 今昔フォーラム」

「1900年代、数多の博覧会が開催されてきた大阪・上町台地を視点場として、これまでの軌跡から、来る2025年大阪・関西万

博に報告する際のプレゼンターを務めたそうだ。鼎談は池永氏の主導により、「まず、万博ってなんだろう？」という問いかけから始まり、「あなたにとって、都市と博覧会とは？」について、事前に記入を求められていた会場参加者のアンケート結果なども交えながら、活発な意見が交わされた。なかでも、70年万博の時代を経験していない山蔦氏が万博を翌年に控えた上海を訪れた際の経験から、「新しい文化、新しい意識改革が進んでいくところを目の当たりにし、万博というのはすごい力を持っているのだなと素直に思った」と語り、「いろいろな情報が手に入る時代だ

博と、さらにその後の百年を見はるかし、再起動すべきものは何なのか、都市と博覧会の世紀をレビューする」イベントが、2019年9月28日、大阪ガス実験集合住宅NEXT 21にて開催された。

会場正面には大きなスクリーン、その両脇の壁にも小さなムービーでこれまでの上町台地を舞台にした博覧会の様子が映し出される。タイトルやプログラムに「レビュー」とうたっている通り、講義というよりショーを楽しむという場づくりがなされており、期待感を誘っていた。

大阪が歩んできた 博覧会の歴史を読み解く

まず1900年にパリで行われた万博の映像を映しながら、弘本由香里研究員による解説から幕を開けた。映像から伝わる当時の人びとが受けたであろう衝撃をも追体験してもらおうという演出である。

続いて舞台を日本に移し、都市が舞台となった1903年第5回内国勸業博覧会、それを経て1925年に開催された大阪記念博覧会、さらに第二次世界大戦後焦土と化した大阪の地で1948年に開かれた復興大博覧会について、映像資料を駆使した解説が行われた。なかでも復興博の「その後」の説明や、復興博とその前の大阪博は毎日新聞社が主催したものであったという解説を特に興味深く聞いた。

続いて、古川武志大阪市史料調査会調査員

からこそ、生でほかの人たちと一緒に体験することの価値があがっている。万博といった体験の価値も高まっているのではないかと話したのが印象に残った。

その後1〜3幕を通した感想として、会場の参加者からも多くの声があげられた。実家が第5回内国勸業博に出店していた方の話や、70年万博に参加した方の思い出などのほか、毎日新聞社の方からは、大阪博と復興博を主催したのが自社であったことにふれ、当時の新聞社には自治体などと共に新しい社会を作っていくという姿勢が常にあり、マスメディアとしてのありようをあらためて考える

による『『大大阪』へのグランドデザインと、都市戦略としての博覧会の過去を読み解く』。時代により変わる都市の役割について、博覧会を軸として講演された。

大阪の近代史料を調査し、大阪の大衆文化にも詳しい古川氏によれば、「大阪の人は案外大阪の歴史を知らない」そうである。たとえば、天王寺公園が第5回内国勸業博覧会の跡地だとは知っていても、その実際の内容やなぜそこで行われたのかなどについてはよく知らないという。そういった、実は知らない博覧会の経緯を解説しながら、それぞれの博覧会の成果は都市の遺産として残され、現代につながっていると話した。

また各博覧会のテーマは常に未来を展望するものであったとし、次の2025年の大阪・関西万博のテーマがどのような方向になるかを決めるのは我々の眼差しであり、自分の問題として考えることが大切とまとめた。

2025年とその先を見据え 大阪万博を考える

最後は「2025年大阪・関西万博とその後の百年に向けて、都市と博覧会を再定義する」をテーマに、鼎談が行われた。

登壇者は、先の古川氏、池永寛明CEL顧問、大阪大学大学院工学研究科で機械工学を専攻する山蔦栄太郎氏である。山蔦氏は、池永氏が座長を務める「大阪・関西万博会議（ワイガヤサロン）」の若きメンバーでもあり、そこでの議論をまとめたものを万博関連組織

きっかけとなったとの話などが聞かれた。

最後に池永氏により、百年後の社会に思いをはせながら2025年を考えていきたい、今後自分自身のこととして議論を続けていきたいとの言葉で、締めくくられた。

立ち見がでるほどの参加者で盛況となったフォーラムだった。しかし、アンケートの記述からみる2030年に向けた展望は決して明るいものではなく、万博への前向きなイメージを抱けていないのが現状でもある。古川氏や池永氏の話にもあったように、今後万博を「自分の問題」としてどう考えていくかが肝要となってくるであろう、と感じた。



大阪の博覧会と都市の関係をテーマに講演する古川氏（上）。
「社会を変える力が万博で生まれてほしい」と語った山蔦氏（下）。



「上町台地 今昔フォーラム」の詳細なドキュメント・レポートは、CELホームページ上で公開している。
(http://www.og-cel.jp/information/discussion/1284152_16384.html)

私と神戸

文 高山なおみ
Takayama Naomi

画 浅妻健司

私は今、神戸に住んでいます。

長い間東京で暮らしていましたが、思い切って引っ越してきました。六甲山のふもとにある六甲という町に住むようになって、もうじき四年になります。

この小さな町には、私が知っているだけでもキリスト教の教会が四つあります。珈琲の自家焙煎のお店や美容院にも、歩いているとなぜかよく出会います。どうしてなんだろう。

整骨院や鍼灸院が多いのは、「坂のせいやと思います」と、六甲生まれ六甲育ちの友人が教えてくれました。

そう、私の住んでいるマンションも、びっくりするほど急な坂の上に建っているんです。いちばん近いコンビニとパン屋さんへは、海を見下ろしながら坂を下って二十五分。スーパーまでは直進なので二十分。郵便ポストがその途中にふたつ、通るたびにお参りを欠かさない、かわいらしい神社がひとつ。

坂を下りたら、当然上ってこないとならないので、用事がない限り、私はほとんど家にいます。何をしているかというと、パソコンに向かって書き物の仕事です。

一日中家にいてもちつとも気づまりにならないのは、

乗ります。チョコレート色の車体に緑色の座席が落ち着いた雰囲気列車で、私は山が見える側のシートに座るのが好きです。六甲の山々は、季節を追っている色合いを見せてくれます。

学校帰りの小学生が乗ってくる時間も好き。お揃いのブレザーを着た、おしゃまな女の子たちの会話に耳を傾けることもあるし、読書に夢中の子の本を、気づかれないようそっと覗き込むこともあります。

お洒落をしたおばあちゃんたちが、神戸弁でおしゃべりしているのも、いいなあと思ひながら聞いています。同じ関西弁でも大阪や京都とは違って、のんびりしているのです。

とつぜん料理の話になりますが、兵庫の友人たちの作るごはんはみな薄味で、新鮮な海の幸や、みずみずしい野菜の持ち味をいかしたやさしい味つけ。私もすっかり慣れ親しんだその味は、独特のあたたかみを持って耳に届く神戸弁と重なります。「してはる」などと、動詞の後ろに「はる」をつけるところがとくに好き。「おみかん」とか「お大根」とか「お布団」とか、何にでも「お」をつけるのもいいなあと思う。どちらも敬いの気持ちを感じます。

そういえば、阪急電車の中で酔っぱらっている人を見たことがあります。東京では私もよく飲み屋に出掛けていたけれど、神戸の人たちは、夜遅くまでお酒を飲んで騒いだり、くだを巻いたりしないような気がする。お店も早々と閉まってしまふし。そういうところもいいなあと思う。なんか、品があつて。

南の窓いっぱい海と空が見えるし、正午と夕方六時

には、教会の鐘が鳴り響くからでしょうか。カラーンカラーン、カラーンカラーン。ときおり風にのって、汽笛がボーッと鳴ることもあります。海からの風は、旅を連想させます。

冬は、陽の出が七時ごろなので、このところ私は、大阪湾の向こうの山から顔を出す、大きな太陽を眺めるのが日課になっています。

今朝は六時に目覚めました。カーテンを開けると、真上の空には三日月がまだ光っていました。街の夜景も瞬いています。藍色というのか、紫紺色というのか、空の高いところは暗いの、山並みに沿って、茜色に輝く帯がすーっと伸びていました。

ラジオのピアノ曲を聴きながらベッドに横たわり、目をつむって、ときどき起き上がっては待ちました。そのうち、火の玉みたいなオレンジの欠片が見えたかと思うと、そこからは速い速い。ちよつと目をそらしたすきに眩しい光がぐんぐんと現れ、裸眼ではもう見ていられない。それでようやく安心し、起きました。

そんなふうに、ほとんどの時間を家で過ごしている私ですが、三宮のデパートに買い物にいったり、大阪や京都まで遠出するときには、六甲駅から阪急電車に

引越してきたばかりのころ、湾の向こう側を西に向かつて滑る白く光った船を、イルカみたいだなあと思ひながらよく眺めていました。

いつも同じくらいの時間に光るのは、傾きかけた太陽に照らされているからだなんだんに分かってきて。そのうち、東に見える白い橋の近くの船着き場から出航していることを知り……ついに去年の夏、その船に乗って、九州の友人の家に行ってきました。六甲アイランドというその船着き場から、夕方の四時ごろ出航すると、翌朝七時には門司港に着くのです。以前はそこから、沖繩に行ける直行便も出ていたという話。

このマンションを下見に来たとき、「神戸は港町やから、よそ者にもやさしいんですわ」と、不動産屋のお兄さんが言っていました。

大きく開けた海を眺めながら、その言葉を肌で感じる日々を送る私は、近ごろ神戸弁がうつってきました。だって、好きやから。

たかやま・なおみ 料理家・文筆家。1958年、静岡県生まれ。『野菜だより』『ロシア日記』『料理』高山なおみ『たべもの九十九』など著書多数。活動の場を東京から神戸に移し、『どもろどだつく』『たべたあ』(共に絵・中野真典)など絵本制作にも取り組んでいる。新刊は『帰ってきた日々ごはん⑥』『写真絵本『おにぎりをつくる』』。

異なるものをつなぎ、 創造を生む場を考えるための10冊

異文化や異分野が混じり合うことで、新たな価値や関係性が生まれます。
今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。



10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

1 『梅棹忠夫の「人類の未来」 ——暗黒のかなたの光明』

国立民族学博物館の初代館長である著者は、1970年頃、文明学者として「人類の未来」の姿を描く構想を立てていたが、未完に終わる。本書では、当時の資料や対談記録を掲載し、さらに氏と面識がある者となし者、異なる世代の有識者による未来論も語られている。そこに自身が思う人類の未来像を重ねてみるのもいい。

梅棹忠夫＝著 小長谷有紀＝編
勉誠出版／2012年



2 『欧米先進事例に学ぶ デジタル時代の 電力イノベーション戦略』

デジタル技術の活用により電力市場で台頭しつつあるエネルギーベンチャー。欧米諸国の電力市場で生じる構造変化を、具体的事例とともに紹介する。技術的変遷だけでなく、規制緩和の流れなどにもふれられており、電力業界の変化と展望を把握するのに大いに役立つ一冊。

アビームコンサルティング、ガスエネルギー新聞＝著
毎日新聞出版／2017年



3 『ページと力——手わざ、そしてデジタル・デザイン』[増補新版]

日本を代表するブックデザイナーが、日本語の表記の不思議さについて論じるユニークな一冊。書くときはヨコ、読むときはタテを好む独自性から、濁点の点が2つある理由、文と改行位置の関係、伸ばす「ー」（音引き）が行頭にきてはいけない理由など——さまざまな文化が遭遇し、絶えざる変化を遂げてきた日本語の特質を再発見できる。

鈴木一誌＝著
青土社／2018年



4 『時間とヴァーチャリティ― ポール・ヴィリリオと現代のテクノロジー・ 身体・環境』

場所と時間、人体の内部と外部、心と体の境界も超え、新たな“接続”を猛然と実現しつつあるARやVR。技術革新について、もたらす「速度」という視点から論じた仏人思想家ヴィリリオに依拠した本書は、ヴァーチャルの浸透に対するリアルの立ち位置を示すオルタナティブな一冊だ。

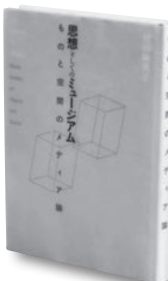
本間邦雄＝著
書肆心水／2019年



5 『思想としてのミュージアム ——ものと空間のメディア論』

ミュージアムは、モノを展示するだけではない。社会のさまざまなメッセージを媒介するメディア（媒体）として捉えることで浮かび上がる、ミュージアムの思想、コミュニケーション、そしてその社会的な意味について考察する。西洋近代からの歴史背景も踏まえた論旨の積み重ねや、冒頭に掲載される学生たちの率直な意見も興味深い。

村田麻里子＝著
人文書院／2014年



6 『人類の歴史とAIの未来』

AIは人類の仕事を奪う脅威か、それとも救世主か。そんな両極端な論争が生まれる背景をひもとき、AIの未来を予想する。仮に、姿や思考まで人間と寸分変わらないAIロボットが登場したとき、自己はあるか、痛みを感じるのかといった問題にも言及。AIを貴方がどう捉えるかは、“人を人たらしめるものは何か”という問いに帰結すると説く。

バイロン・リース＝著 古谷美央＝訳
ディスカヴァー・トゥエンティワン／2019年



7 『〈弱いロボット〉の思考 ——わたし・身体・コミュニケーション』

ひとりでは何もできない〈弱いロボット〉を通じ、コミュニケーションについて考える。自分ではゴミを拾えない「ゴミ箱ロボット」、オドオド話す「トーキング・アリー」など、不完全なロボットに人は健気さを見出し、自らゴミを拾い、手伝い、その声に耳を傾けるようになる。ロボットと人が共生する、ひとつの在り方を示す。

岡田美智男＝著
講談社現代新書／2017年



8 『つながる図書館 ——コミュニティの核をめざす試み』

2000年代中頃から日本各地で始まった新世代図書館誕生の動き。「市民が主役の情報社会」を目指すべく日本独自の図書館改革がいかに行われつつあるかを、著者は「コミュニティ再生＝つなぐ力」の視点から丹念に取材している。それぞれの地域に根ざした豊富な事例が、図書館問題を自分ごととして考えるうえで最適だ。

猪谷千香＝著
ちくま新書／2014年



9 『未来をつくる図書館 ——ニューヨークからの報告』

映画化により、日本でも話題のニューヨーク公共図書館。利用者をして「図書館なしで今の自分はない」と言わしめる、ビジネス、アートなど市民活動への幅広い支援はいかにして可能になったのか？情報のデジタル化、実践的内容のセミナー、市民による地域密着運営など、“つなぐ”場としての図書館を考えると最初手に取るべき一冊。

菅谷明子＝著
岩波新書／2003年



10 『ちゃんぽんと長崎華僑 ——美味しい日中文化交流史』

福建の郷土料理に、長崎ならではの食材とアレンジを加えて生まれた「ちゃんぽん」。その名は「吃飯（チイファン＝ご飯食べた?）」が由来だとも。これを考案した「四海樓」創業者・陳平順の曾孫が綴る本書は、おなじみの麺料理をテーマに、異国の文化・習慣と結びつき生きる「落地生根」の華僑の精神を論じて実に興味深い。

陳優継＝著
長崎新聞新書／2009年



浪花の十二月

「大阪くらしの今昔館」が所蔵する、大坂生まれの浮世絵師・二代長谷川貞信(1848～1940)が描いた
月ごとの大坂の行事と風景の画帖から、特に見ごたえのある場面を紹介します。

(二代長谷川貞信「浪花行事十二月」「浪花風景十二月」より)



5月 橘月 たちばなづき

梅田の堤では5月5日の早朝、近隣の農夫が牛を飾り付けて堤で自由に駆けさせる「牛の藪入」が行われた。牛が病にかからなくなるとされ、農夫は牛にちまきを食べさせて人々はその様子を見学した。また、子供がそのちまきを食べると痘瘡(天然痘)が軽くなると信じられていた。

梅田牛の藪入り

「うめだうしのやぶいり」



3月 雛月 ひなづき

住吉汐干狩り

「すみよししおひがり」

住吉高灯籠のおかれていた浜は汐干狩の名所であった。3月のひな祭りの頃には大坂や近郊の人々が身分に関わらず浜へ出て、蛤をとって楽しんだ。屋形船で十三間堀川を通り訪れる一行もいる。長峽橋の西詰にある茶店では、蛤の吸い物を名物としており、「蛤茶屋」とよばれた。



6月 皐月 さつき

茶臼山は一心寺の南にあり、もとは前方後円古墳であったと伝来している。大坂冬の陣、夏の陣で陣営にもなった。宝暦9年(1759)の一心寺出開帳の折には茶臼山も仮設の茶店でにぎわったが、その後は立ち入りが禁じられた。江戸の道灌山・京都の嵐山・大坂の茶臼山と並び称された。

五月雨の茶臼山

「さみだれのちやうすやま」



4月 卯之花月 うのはなづき

ざいば魚じま

「ざいばうおじま」

雑喉場の魚市は江戸堀・京町堀などの西にあり、魚問屋が軒を連ねた。遠近の浦から運ばれるのは、クジラやマグロといった大魚から、イワシなどの小魚までさまざま。明け方のまだ薄暗いなか、問屋の提灯が光る。魚を小船から降ろし、問屋に運び込むにぎやかな様子が描かれている。

CELホームページ

<http://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容や情報誌「CEL」バックナンバーをご覧ください。

※CEL ホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

Facebook ページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

Volume124
March 2020

特集

異なるものをつなぐ

——混じり合い、創造する場とは

2020(令和2)年3月1日発行

発行

大阪ガス(株)

エネルギー・文化研究所(CEL)

〒541-0046

大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人

田中雅人

企画・制作

熊走珠美

編集人

日下部行洋

編集

(株)平凡社

アートディレクション
&デザイン

okamoto tsuyoshi +

校正

(株)アンデパンダン

印刷・製本

(株)東京印書館

お問い合わせ窓口

大阪ガスビジネススクリエイト(株)

TEL 06-6205-4650

FAX 06-6205-4759

CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2020 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

CELからのメッセージ

異なるものをつなぐ魅力

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所

所長 田中雅人 Tanaka Masato

“Creativity is just connecting things.”

スティーブ・ジョブズの有名な言葉である。iPhoneが商品として世の中に現れた時、世界は驚きの渦にのめれた。しかし、iPhoneのコンポーネントはそれまで存在していた技術の組み合わせであった。つまり、携帯電話、タッチパネル、インターネットはすでに存在したが、それら異なる分野の技術をうまく組み合わせて、ひとつの商品にしたことで、スマホ革命につながるものの誕生になったのである。

世の中には、異なるものがつながって、新しいものが誕生するケースがたくさんある。しかし、異なるものは偶発的にはなかなかつながらない。異なるものがつながるためには、「場」「お節介」「意欲」が必要である。

シリコンバレーはベンチャー企業やクリエイターが集まって、新しいものを作り出す「場」であるし、ビジネスマッチングを図る「お節介」な目利き役がいるし、何よりも、我こそは世の中に新しいものやビジネスを作り出すのだという「意欲」のある若者が集結している。頼もしい限りである。

我々がいるエネルギー業界もまたしかり。かつての閉鎖的な業界に異業種からの参入、つまりエネルギーと異業種の出会いによって、新しい商品やビジネスが生まれてきている。GAFAと呼ばれるIT企業がエネルギー業界に進出し、新たなビジネスモデルを模索しているのは、とてつもない脅威であるが、我々はそれを待ち受けていてはいけない。むしろ、彼らよりも先に、我々こそが、アンテナを張り巡らして異分野に触手を伸ばし、新しいものを生み出していかなくてはならない。攻撃は最大の防御である。能動的に、異分野、異文化、異業種との接点の場づくりをし、お節介提案をし、そしてそれらを意欲的につなげていくことで、明るい未来を切り拓いていきたいものである。新時代のエネルギービジネスの模索は、未知への挑戦であり、新しいものを生み出す喜びであり、それこそが、いま我々に求められる使命ではないだろうか。

文と選／服部麻衣
(はっとり・まい)

島根県出身。京都市立芸術大学で美術鑑賞教育について研究。卒業後は美術の教員として実技や美術史の授業を担当。2008年より「大阪くらしの今昔館」で、博物館における学びを推進する活動に取り組んでいる。

